

“*HAIKAIJURON BENHISHO*”

– a Commentary on “*HAIKAIJURON*”

Yasuyuki Nakamori
Eri Nagata

Abstract

“*HAIKAIJURON*,” written by Shiko, who is known as a controversialist among Basho’s disciples, made a great contribution to the propagation of “Shofu Haikai” in the Edo period. Shiko and his disciples had been giving lectures on “*HAIKAIJURON*” all over Japan throughout that period in order to teach ordinary people Haikai.

However, “*HAIKAIJURON*” had been too difficult for us to understand and explicate for readers today. Moreover, we had only two explications of “*HAIKAIJURON*”—both published in Edo period (“*JURONIBENSHO*” and “*JURONHATSUMO*”)—from which to work with. Although we tried to explicate “*HAIKAIJURON*”, there had been too few sources related to “Mino-ha” (Shiko’s group), thus far.

In this paper, we are going to introduce and reprint the book called “*HAIKAIJURON BENHISHO*”. It is a transcript of a lecture on “*HAIKAIJURON*”. After analyzing this text, we found that all annotations were very close to Shiko’s original theory. As a result, we concluded that this work is very important in understanding “*HAIKAIJURON*” and the actual situation surrounding Shiko’s lectures. In other words, it might be consider another “*JURONIBENSHO*”. We are convinced that “*HAIKAIJURON BENHISHO*” has been of great use in understanding “*HAIKAIJURON*” easily.

○真言の干詐「虚実のまゝ」也。詞にあるを「干詐の真言」、意にあるを「虚実のまゝ」といふなり。是皆詞のうへにて前後する所をいへり。此理は明らかならども、人により通・不通あり。故にまどふ人有べし。是をよく師に学べと也。

○其実の隠 其実の行ひ安きゆへにおだやかなり。⁶²

○笑語 口伝別記。

○詞の表裡 『法華』に実を説といふて、『涅槃』で方法空なりと宣ふ。是真実の干詐、『為弁』にて可考也。子遊が牛刀の答に、「先の実は戯れらくのみ」とのたまふは、「虚」也。「実」は子遊をとがめ給ふ也。此上を断給へば理屈に落るゆへ、「たはむれ」と逃げ給ふ也。

○居の一字 「居」斗に非ず。「起」といふもの籠れり。「智」なり。「変」なり。

○其虚喜怒 悦ぶ「虚」は知れ安く、則「和」也。怒る「虚」は知れがたく、「節」也。彼「二椀の茶」の類、「笑中の刀」なり。

○意対の妙

○奪胎 蚊虻のそしり、金石の契りと対したる也。口伝別記。⁶³

此論「姿情」と同じけれど、情には何もない姿の論といふべし。抑「姿情の論」といへる事、我家第一の眼目にして、『十論』の理、爰に尽せり。我家の俳諧の、姿有て情なしといふにあらず。物に姿あればその情なき事あるべからず。只「姿情の前後」なり。たとへば天道人を殺さずとして三日も五日も天にむかつて喰わずに居ば、必飢に及なん。其人殺さぬ情をもつて相応のかせぎをして今日を過す、是姿なり。むかし南都の或房の主、同宿をしかりて「斎

非時食しながら坊主の用事に応ず」とい、けるに、同宿答て「第八識の所変の食也。我果報なるにあながち恩にさせ給ふな」といふ時、「さらば其方が所変の食を喰え」とて追出しぬ。是則八識の情を知つて、己れが働の⁶³すがたをしらず。⁶⁴

貴重な資料の閲覧及び翻刻をご許可頂いた国立大学法人九州大学附属図書館、貴重な資料の閲覧をご許可頂いた大垣市立図書館、岐阜県図書館に厚く御礼申し上げます。また、資料閲覧に際しお世話になった野呂鎮子氏、ご教示頂いた長瀬とも氏に感謝申し上げます。

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「支考俳論と美濃派伝書の俳諧史的展開の解明」（課題番号 21520188）の成果の一部である。

和」也。「実」を尽すものは父子・兄弟・師也。是功成て不居といふ処也。いかなる孝をも尽す筈なり。「義」を尽すものは君臣・夫婦・朋友也。是「為而不恃」といふ所也。かやうの骨折しただけれど、先が骨折しるをせぬ事をうらみぬ、是義理なり。是を知らぬときは父子・兄弟・師に実を成す。君臣・夫婦・朋友、義をなせども過不及が有て、骨折すれども「礼がない」のなんのと理屈に落て、却而害になる也。是堪忍の場なり。夫婦・朋友には間に其理を行ふ者あれども、父子・兄弟には行ふものを見ず。是「父子・兄弟は魏々として居るもの」と心得て居るゆへ、合の理を行はぬ也。我家にては父子・君臣の間も「虚」と見て居る故也。

然れども、和して流る、といふ事有。親子・兄弟・君臣には和して流れねど、夫婦と朋友には和して流る、ものなれば、此塩梅をよく考えて行ふ也。是は儒にも仏にも説かぬ所なり。能く考へよ。

○兩翼の用 「虚」といへば「実」あり、「実」といへば「虚」あり。離れて行はれぬものなり。

○虚実の先後 『論語』には管仲が二君に仕ふ仁を誉め、伯夷が首陽に遊ぶ義をほめ給ふ。管仲は仁を表にして義を内にせり、伯夷は義を表にして仁を裏にせり。兩人ともに「虚実」をよく知れる故に「誉たまふ也。是を以「実先虚後」、「虚先実後」も家々の立て派。仁は「虚」、義は「実」。問、俳諧の虚実も『論語』にいふ礼の和ならば、『論語』の礼和にて済べきと也。答て曰、礼には諂諛の紛れありて、其「礼の実」を表とす。礼に「諷諫の和」を行ひて、俳かい「和」を表とせり。いはゞ「礼」を体とし、「和」

を用とす。我家には「和」を体とし、「礼」を用とす。「和を体」は「虚に居る」、「礼を用」は「実を行ふ」。

○居を問 人有て、「虚に居て実を行ふ」、「虚」の字を問はん。その問ふものが「虚に居て」問ふならば、忽「実」と成る。是応時機変なり。「我もし実に居らば」とは、右の「実」となつて今暫く居るといへども、元の「虚」にもどる。畢竟其時の「変」を諷事(諷事)也。然れども其の「虚」を居り所と₆₁する事は、「虚」は広大にして諷がたく、「実」はすこしくして行ひ安きが故也。是を安くいはいはゞ、彼もし「虚」におらば、忽「実」に居て又もとの「虚」にもどると言ふ事也。か様にい、つめたる故に、是をちらさん為に、龐居士が詞を出せり。

○龐居士 もろくの有体を「有」とみずして「空」と見る処、「無」をも「無」と決する方なかれ。「所無」とは言語不動の場、爰が則、「居」の字を打碎て、「居」の字を「変」と見て、「居て居ぬ」と心得るが第一の事也。『為弁』に「『居』の字を『変』とみるべし」となり。

伝曰ウ

○言語の表裏 万巻を学んよりは、言語の一理の信のうらを察すべし。儒仏の万巻も言語の一理の違にて、爰に自己のあんばいに傾けば、偏に落る也。たとへば我子を甚叱れども、心には悪まぬ也。又常々かね借る牢人は、うはべよく拵れども、内心には甚嫌ふ也。是言語の表裏なり。

○迂詐の真言

○実に居て虚に遊ぶ『為弁』に「他門の宗匠」と。是は他門のみに非ず、名護屋の露川なり。此論は大道の「動く」と「動かぬ」と有。殊の外大切なる事也。先師、露川を責し書状あり。板本にはなし。青木紀伊守、実は石田に心を寄すれども、「虚」にウ家康公にも内通す。故に則家を亡せし也。此「実」に居て虚を行ふ。

寒る夜に体の出来たる千どり哉

実ニ居て虚也。利屈。

立たりに男山口はつがすみ

実ニ居て虚を行ふ教下の句也。

かりそめにそなれ紅葉の越の空

実ニ居て虚を行ふ。

ほのかにきけば黒砂糖数寄

此露川流の附句也。

○是非をとがめず「為シテ而不レ持タケヌ」といふ事也。彼が利くつに此方の利屈を重ねず、道理に化して過す也。人に物を施して悦ばぬとて構はぬ也。陰徳といふも是らの事也。

○親疎には我を忘る 功成て不居といふ事也。此間より徳といふ一字を生るなり。是非には人を忘るべし。人の是非を深くとがめず、是、利くつをはなる、用意也。⁵⁸「親疎には我を忘る」とは、彼四海皆兄弟也。親と疎に我を忘るときは、うらむべき事なき也。しかば菝生の人か。さに非らず。是皆世法の忘れ難く、利屈に落ちゆへに如此いへり。忘れぬゆへに身をもはたす也。『為弁』に可考。『為弁』に曰、「先師『つれづれの讚』、『徒然草』に曰、是なる時は悦び、非なるときは恨みず。是人と我との親疎、是非を忘る、事の証人に、兼好を雇ひ来れり。又曰、兼好、師直に頼れ艶書を書し事、林羅山子が『野槌』には「法師一大の失也。慎むべし」等といへり。又さもなき『参考』、『文段』、『ばんさい抄』などに「兼好は世捨人なれば、物にか、はらねば書そふな物」など、

いひて、評者の心に任せ、褒貶有。皆非也。そも此艶書を書し出所は、『太平記』より外になし。ウ此書は文華甚多くして、千騎を万騎といひ、十間を百間ともい、其外不実多し。師直など、いふ者、左様のふつ、かなる事にあらず。其比は頼阿・兼好・浄弁・慶雲とて和歌の四天王あり。此人きども、月花の折過さず歌など読ける趣、頼阿の『草庵集』などにも「師直朝臣が歌合によめる」等見へれば、中／＼艶書など事おふせぬ男にあらず。ふつ、かなるやうに書ねば、師直が悪ふなき也。されどもか様に汚名を残す事、実師直がふつ、かなる形なり。かやうの出所より見れば、兼好書ざる事明か也。是も非もなきなり。

○実に居る人は親疎「実ニある」故にうとき中なれども、「ちからを尽し是程はたらけども何とも思はぬ」⁵⁹と人をもそしり、我も腹立後は、いさかひになりて身を果す。

○彼は仁にして 世界皆非なるものと心得て「大虚に居る」也。爰が「変」を知る工夫の居へ所也。人間万事塞翁が馬、世の中は万事非なる物にて、今日の是は無頼也。是を知つて是非をとがめず、親疎に我を忘る也。是「虚ニに居る」ゆへの態なり。故に我家にも「時宜」の一法を立たり。「時宜」は「人和」なり。実の害をいはゞ、「孝はする筈也」とおもふは親の実也。是を一凶におもふて居れば、何ほどの孝をしても孝と思はずして不足也。然れば、「足らぬ／＼」と思ひ口にも言はゞ、其子もちからなくして後は不孝になるなり。「虚」に居らば、「孝はする筈なれども、人々力つくされぬウ物」と思ひ、いさ、かの孝を尽しても、「扱孝なる子哉」と意にもおもひ、人にもかたり誉れば、子もいよくなづき悦ぶ。是「虚の

は小さし。

○大小の論 針と船とにたとへて大小の論と見ゆるけれども、さにはあらず。

○先後の弁 先後するやうなものと言事也。天地陰陽は「前」にして「虚」、君臣父子は「後」にして「実」也。

○其実の行ひ安く

○其虚の説がたからん 口伝別記。

○天堂（本） 地獄 天堂とは「虚」悟り安く、地獄とは「実」迷ひにくし。悟ることは安きもの也。先迷ふべし。まよひ果て得る事あり。

○天堂は「道理」、地獄は「利くつ」。「理屈」の偏に凝る事は、却而行ひにくし。天堂は「大虚」行ひ安く、地ごくは「小実」行ひにくし。善は法あれども、修しにくふして修し安し。悪は法なき物ゆへ、修し安ふして修しにくし。是は筆に書れず。弁にのべられず。自ら修して観ぜよ。

○出る所と入る所 出る所は「虚」、入る所は「実」、是も「前後のころ」にみるべし。

○其虚の危からんよりは

○其実の穩ならんには 口伝別記。

○大学序 其高事『大学』に過たれども誠少なし。⁵⁶儒の偏屈に凝たる所を破して、俳諧の自在を考るときは、儒仏の内証を知べきなり。

○虚に居て実を行ふ 獅子門第一の義なり。「虚」は「和」也。たとへば「父子の間に真実を以て向ひ、君臣の間に義理を以て向ふ」と、『白馬』の「教誡訓」に出たり。孝といふは真実の眼に見えぬ処

にもあり。是皆「実」の行ひやうの塩梅也。口に孝を行ふといはずとも、胸中に真実があれば、少しの孝も親の身に通ずる也。万金を費しても、真実がなければ通ぜぬ也。真実は我より内に顕はる、もの故、孝行には礼義は無くてもありなん。平日の事を氣詰りにしては、孝は行はれず。眼にあらはれたるを義といふ。是君臣の義也。或は急難に楯になり、「身」を捨、命を捨るなり。

たとへば世界に命を捨るものは、利屈に利屈を重て命を捨る也。又、「変」によつて命を捨るは、是天命の徳也。是例の我家の細蜜をのべたり。委は『為弁』に考べし。楚莊王（ハリガミ）絶纓の会、是則、「虚」に居て実を行ふ。扱こそ其臣、常に身を捨る程の忠義をなして報へり。味方ヶ原退口弁有べし。

さん銭もなふて奇麗なお寺様といふ前句の虚情を見込んで、旦那のない寺を「奇麗な」とは、「実」か「虚」か。「虚」にていふと、とく落着して

茶漬の礼にうそ一つつく
と前句の「虚の情」をとりて付句に「実の姿」を述べり。⁵⁷是にて考ふべし。

あらかねの芋はくくと売あるき

こよひの月の名は隠れなし

虚に居る人は山本勘介、諸州の君には「虚」にあそび、信玄には「実」に仕ふ。

八朔も九日も酒の沙汰ばかり

朝寝夕寝に年寄の妻

此段よく考ふべし。

つて。」定家又御答申されしは、「実すくなきにてこそ歌は述べれとこそ」と也。⁵³

○虚実の虚実 口伝別記にあり。「虚実のまゝ」といふものは、畢竟「時宜」の事にして、「虚実」とばかりいふときは儒仏の内証にして、段々いふところ也。「虚実のまゝ」とは、「虚実の実」をすれば君となり、「虚実の虚」を知れば師となる。畢竟是は天命にして、いづれか拵はんや。とかくは其変に應じて時の宜をさして、「虚実のまゝ」とは心得べし。孔子は仁の一字を説て仁中に義をふくみ給ふ。故に孟子は仁義を説て理論につのり給ふ故に、似て非なる所がある也。『為弁』にて可考也。或は其「虚」にいさ、かの「実」あれば城をもたもつ、是「道理」なり。其「実」に聊の「実」あれば「利屈」となる。小人になる也。『為弁』に「其虚に虚なき」と言弁、大悟發明の「人」也。龐居士が遺言も此事なり。

○不道化 不道化とはおかしき事なれど、其おかしき事も尽て笑止になる事なり。

○心のほだし 「実」に凝つて居るゆへ、俗に「あの人はどうやら内に一物ありさふな人」といふ事也。

○莊周が家 爰が『十論』の大論を述たり。礼の用は「和」を尊しといふ、我家の「虚」なり。

○実是好悪の二 「実」には「好悪」あり。君父に争ひて「実」を説けば、君父いかる。是「実の悪」也。○虚にはさまざま、仰げばいよ／＼高しといへるがごとく、限りもなく「和」有ものなり。「虚」は広く、「実」は狭し。

○他国へ行 家をも捨、牽人するなり。⁵⁴

○金くれる 「金くれる」といふ約束の違はぬは誠に嬉しく、「首さらん」といふた事のたがはざるは誠にかなし。

○遊人 諷ひ・舞・座興をいふて、一物を心に構えて氣に入らんと諂らふは、佞人の讒言也。

○文道の六義 風・賦・比・興・雅・頌。

○武道に三略 謀を帷幕のうちにめぐらし、勝事を千里の外に決す。「略」の字の味、武道の文なり。是尚我家の「和」なり。

○文雅には 文雅は虚実、武略は実虚、いづれも机上の工面ながら、文雅大いなるには、口を出せば鬼神も感じ、謀を行へば猛兵恐る。是則機変に應じて行えばなり。⁵⁵

○言語に 談笑を以和優する。よく諷諫をもつて口に背かぬ所なり。

○虚はお、ひにして 廣大にして限りなし。「実」はこるゆへにちいさし。

○其針を 虚実自在・不自在をかたどりいへり。「実」の微小なる、針のほそきとて、其害を通るべき也。

○その船をとがむ 是にて「和」を像るを考べし。

『莊子』に曰、「船を引時、空舟が来て横にあたる。人なきゆへにとがむべきやうもなく、又腹もたゝぬなり」。是うちに一物なき故也。其中にちいさき子供にても乗れば、早とがむる也。腹も立也。そのごとく、此方の胸中に一物なければ、向ふも一物なき也。神に向ふても⁵⁶仏を拜みても同じ事也。俗に相手の持たず機といふことあり。可考。其持たされた機の時は、仁和急用也。

○天地陰陽 陰陽五倫の各道、是「虚」也。夫を行ふ「虚」、則、君臣父子の道也。是を「実」といふ。然れば「虚」は大いにして、「実」

是がなければ天地も凝かたまるなり。世にいふ、「儒は表に実を説て、裏に虚をたゝむ。仏は表に虚を説て、裏に実を包む」。我家は虚実を一物にとくなり。『つれづれ』に曰、「己が分をしりて及ばざるときは速かに止むを、智といふべし。ゆるさざらんは人の誤りなり。分をしらずしてしるてはげむは、己があやまり也。乏しくして分を知らざれば、盗む。ちからおとろえて分を知らざれば、病を受」といへり。⁵¹

○言端の虚実 　しらぬ学者は、「虚」といへば偽りの如く、「実」といへば、そら言いわぬを「実」と思へり。さに非ず。天地ひらげざる初め、鳥の印の如しとてすめるものは登りて天となる。是「虚」也。濁るものは下りて地となる。是「実」也。生るゝにも未生有、為生有。言をいゝ出すにも、「いはう」と「おもふ」と「虚実」有。○聖人の意にさばくを虚実といゝ、小人の口先で転動するを「誠偽」といふ。似た物にて一步千里の違有。天理自然に任ずを「虚実」といゝ、人慾の私に行ふを「誠偽」といふ。「虚実の変」を知るを聖人といひ、「虚実」の用る事をしるを賢人といふ。尚「為弁」に委し。「虚」に「虚実」あり。「虚実の虚」あり。是、俳諧の家の蜜法也。⁵²

虚実の实 ⁵²

虚実の虚 　伝別記有。 　仏經の「寂」、儒書の「権」、是則、「虚」也。○箱のたとへ 　人の心は重箱のごとし。煮しめ等を久敷入置ときはくさるなり。人の心も斯の如く、彼色々の七情八識が入り、こり堅まると必くさるゝ也。しばらくも早く洗ふべし。孔子の語、「為弁」に委し。儒仏老莊ともに、先か後か、「虚実」がなくては叶

はぬもの也。「其叶はぬ物を導がはいかいなり」との玉へり。

○馬麦 　仏教は「虚」を表に説ども、是は「実」を表に立ていへり。

○牛刀 　儒は「実」を表に教ゆるけれども、是は「虚」を表に立、⁵²「実」を内にして説り。

○連歌は実 「実情にして、俳諧は虚頭也」とおもふてゐる、誤りなり。

連歌は内に「虚」をつゝみ、外に「実」を顕はす。俳は内に「実」を包み、外に「虚」をあらはす。是は先師口伝の処にして、『為弁』にも出ず。大切に聞べし。

○花実の先後 　口伝別記に有。

○道理になびく なびくといふもの、男女愛情の間、七情の内甚しきもの也。其中にも遊女の類も、富貴の客を憎んで、貧者を愛するもの有。富貴は銀の威を以ておすゆへに、「和」たらずして其座も面白からず。故に、にくみうとむ。貧者は銀足らざる故、真実を尽して心の淋びに其坐を尽すゆへに愛⁵³情ふかく、遊女もその心にとけてなびく也。

○虚実の品 　天地開くるより道理は五つゝに別れねばならぬもの也。夫をその利に怒てわけんよりは、其和節を行ふて、同じわけ口を諷諫に分けたらんがよからん。善ならばいよく「実」を以善をすゝめ、悪ならば「虚」を以悪をこらす。「和して塩梅せよ」といふ事也。

○扱や「俳諧廿五ヶの伝」にも、「詩歌連俳は上手に嘘をつく事也」。されば歌にも、後鳥羽の院の定家卿⁵⁴え、「古今集」六歌仙の内いづれを師とすべしや」と勅問有りしに、定家の卿いへらく、「僧正遍昭をこそ」と。上皇又宣く、「誠すくなきとあれば、何を

東北の角の番匠の引頭が生れたると見へたり。様有もの成べし」と申されけるとぞ。泰時が「我と虚」なるをみるべし。

○哀楽の間 虚実を行ふて。

伝曰

○俳諧の内証 儒仏の立様より、詩歌は表に信をあらはし、内に虚活を包む。禅と俳とは、他に信を顕はさず、内に信をもつて、外は虚活を見するなり。

○外の親疎 とは譬、訴状の理屈の強きに、其ものに五倫の親疎はなけれども、其場に親疎出来るなり。⁴⁹

是を敖訴の 五倫の外に親疎出くれば、能考て其理の理にもしんしやく有べき也。利慾におぼれて公事を好む人あらんに、理屈を重ねいへば、親疎の外に親疎が出来るものと、敖訴の誠めにはいふたけれども、公事ばかりに非ず、万事勝負の能いましめの名言といはん。言行の善行也。

○人和に強柔の力 知るときはおしへ、知らざるときは遊ぶ。「あそぶ」と「教る」とに強柔をそへたり。

○天下の人 天下の人をい、つめる事、言語同断の処也。言つめる斗でない、「虚実」、「方便」、「諷諫」を知れとなり。「天下の人をい、つめる」とは、天下の人の返答ならぬ所也。

○信の一字 是骨説也。「伝は家より内に起り、徳は人より外に顯はる」。是、翁の金言にして常に心に保つべし。此二句は座右の銘にしてたへずみるべし。

○たばこ 是「隠徳」也。其時、其角供せしが帰りに申けるは、「今

日煙草を召ざるは是「諂」ならずや」と。翁の答に、「さには非ず、是「時宜」也。「諂る」に非ず」。己れが道理を怒ることはたばこ斗に非ず。万事にわたる也。

○天の徳を我に与へ給ふ所を行ふ。我はなさずして、天、然と授け給ふ也。たとへば発句の透逸を仕出したりとも、是、天より授給ふ也。此塩梅は能く味ふべし。我を忘れて天とおもふ時は自らほこらず。故に隠徳也。「為弁」に武帝・顔回が事あり。

法然上人の歌に⁵⁰

我はよく聞わけたりと思ふこそいまだしらぬはじめなりけり

○錯綜 下からくるくまはつて、其意を能く、るをいふ。

○反魂 文章を誉て言へり。それと是とを合せて文章の一体とす。或は遠きと近きとを合す。

○虚実論

虚実とは弁をもつて説尽されず。「虚実」と口に言へば、もはや二義になる也。虚実、本と一つ体にして、其虚実弁じて曰、「虚といへば、はや実がありがたしく」。うたらぬもの也。此段は殊の外六ヶ敷、我家に設処也。

○変化を知る 天地自然、虚実の設様、万事「変」にて設はねばならぬ物也。此「変」なき時は、「実」は「実」、「虚」は「虚」と、こり堅まるなり。天は照らす斗が実なれども、雨降風吹の変あり。

と随ひまはる也。此設は人々の心に有事にて、人のしらぬことなり。「諷諫」と「諛諛」は、面は似て内はうしろ合せのもの也。達磨伝授の弁、二視に道を伝へ給ふ意、あらまし『為弁』に考、尚、禪坊主に聞べし。

○我家の密法 わが心の内なれば、人の知つた事に非ず。人々の心のうちに有ものなり。

○詞の鼓舞 文章のおもしろきこと、曲といふもの也。

○分別 「いかにせんく」と胸中に戦ふて、是非を分たる所が分別なり。

○無分別 其分別の中なるものを取て、「是ぞ」と顯はれ出る処が無分別也。畢竟有分別にこり堅まる故に利屈と成、迷ひと成。それを打碎きて道理となり、悟りと成る所が無分別なり。○分別といへるものは、「兎やせん角やせん」と心にこつて諷て、善悪をわけて決定して出る也。無分別は分別の間よりその中を見出して、一向に「是ぞ」と出る所なり。故に分別は無分別の先に立て、無分別の後に顯はる、⁴⁷ものなり。夫を間違えて、「俳は分別するに及ばず。とかくすらりくとするがよい」と心得違して、惟然が類有し也。○名人の場は無分別の所に有。上手の場は分別に有。分別にこり果て居ると、はや利くつになる故に、道理の内に悪きものと成。その道理の堅まる所、理屈の悪也。

○善悪三 道理一つ、道理の内の悪一つ、利屈一つ、都て三也。

○五倫の道 我家で段々説く如く、五倫の道の拵様も、又俳かいの附句の味も、ひとつといふこと也。同じ心法也。その味を伝ふて行ものは道理の人和なり。問、「それを急用といふは如何」。○答、「五

倫の人和とは、今日の人理を調へて行ふ也」。たとへば天の陰晴を悦ぶ者有て、又怒る者有。是天理なり。其日の機嫌を見合行ふなり。天に陰晴有如く、人にも喜怒あり。附句も斯のごとし。前句の体を見て前句に悦ぶ体あれば、其用を悦ぶ処を体として附行ふ処也。悦ぶ体に悦ぶ体を付れば、利くつになる也。今日の挨拶にも如此。

三石祢宜の臂はりたがる

何事も仲人しだいにすまし汁

嬉しや星の空に雪ちる

又

保元の春に花咲かくれざき⁴⁸

雛にうつせば奥も九重

山出しの出代なぶる古参ども

○死活 前に弁ずる如く、動かざるを「死」、動くを「活」といふ。

○天下の治り 天下治るときは「文」を用ひ、乱る、時は「武」を用ゆ。二つながら天下を治る道具なり。

○温厲は智仁也。

○徳は詩歌 詩歌連俳と次第のおとりなり。

○我と虚にして 人の知つた事にはなし。是、「仁和」、「先後」、「温厲」も皆籠る。自敬む也。○「我と虚」とは、内を虚にして居る事也。最明寺殿幼少の時、遊び事に墓を作、仏を作などせられけるを、平左衛門入道、諏訪入道など、「弓箭とらせ給ふ御身の御遊びこそ候らはめ」といさめけるを、祖父泰時、「なぜに制らすぞ。我夢に見たる事有。先世、須達長者祇園精舎造りし時の、

かつ。是虚実に自在ならねば、難叶事也。

○客難・賓戯 『文選』にみるべし。是らも俳諧の為になるもの也。

「答客難」「表賓戯」、可尋。

○利害 諷諫とかたち似たり。言語の設なり。

○仁勇 我家の虚実の設事なり。

○其理の天 天なるは「道理」也。人なるは「人慾」なり。

○俳諧はよし 今日の言語にして、人和を専として、天理の自然に任すべし。^ウ

○機鋒 仁勇を内に包む勇也。是聖の徳なり。

○武家の余力 始に曹操と呉運を書いて、次に「武家の余力」と書り。

是「決前生後」の文勢也。

俳^弁かいた文武 文武を兼たるものといふ。「温厲」なり。

○人のこゝろをいざなへる 雪を尋、月をめ、花を詠るばかりにあらず。人をして善道にみちびかせん為也。その音韻の響と詞の急

緩とにあり。是を天理に叶ふやうに、道に言語の設あらば、何ぞ

鬼神も感動せざらんや。たとへば人を恋ふとて艶書に、おもふ

くくと斗百千字書て遣したりとて、先に感動するものに非らず。

或は山を臨み、川をわたり、雲をかこち、鳥をうらやみ、其せつなる姿情のはこびを書ちらして思ふ事をいへばぞ、「扱は斯く

迄」⁴⁵おもふかや」とて向ふの人が感動するなり。畢竟ちめたる

時は「おもふ」の一字にとまる也。是「文章」也。遠くいはゞ、

言ずともよき事をいふ、是「文」なり。『為弁』に曰、「用は体

にして、無用は用也」と云々。「文章」にも無用の用をしれといへり。

書かでよき事花くしく書つらぬるは、其中に要なる物は只ひと

つの用をいはん為也。故に用は体用といへり。猶又、紙にかく斗が「文」にあらず。一言半句の詞のうちに「文章」有事をよく味ふべし。

○俳諧門 五倫の人和也。上品の人は詩にても歌にても教うべし。中

品以下は六ヶしき詩歌に及ぶ事叶はぬ故に、俗談平話の道を立たる也。詩歌にいはれぬ俗談平話を急用に言ふ。是、歌人・詩人の

及ばぬ所也。「端的温和」の弁有。^ウ端的は「頓挫」也。端的を温和にて教る也。温和は又端的にて教申、是則「虚実」なり。

○其道の塩梅 その道の機変なり。

○三徳 智仁勇也。源頼光笛を吹、袴だれといふ盗人を捕へし弁有べし。

○言語太鼓 人の口に背かぬ処が太鼓に似たといはん。けれども例の「諷諫」と「諂諛」とのまぎれを弁すべし。

○我を知る時は 『為弁』にてはちと落にくし。理に合ふては理に悦び、人敬まうて、其理を貴ぶときは教ゆ。

○我をしらざる時は 非にあふて非を恨みず。其家を用ひぬときは、他門に向ふて不可論の味い也。伊尹が五たび仕へたるが如し。「風諫」と「諂諛」と同じ様になるもの也。⁴⁶口に背かぬを「諷諫」

といひ、心にしたがふを「諂諛」といふ。口とその間を考て行ふを俳諧なり。口に背かぬといふものは、君父の悪有時、諫に十分

の道理を説ども、うけざる時は道理をまげて随ふなり。是其人と

遊ぶ也。意に背かぬとは、悪と見ながら心に何とも思はず、只「あいぐ」とまかりて其悪に随ふ。是我道の罪人にして、「諂諛」

なり。いはゞ、めつたむしやうに氣に入たがりて、「はいぐ」

の言かたの「変」を考しれと也。又曰、文章とは、書に_二筆を飭りたるばかりを文章とは言はず。言つらぬる詞も文章あり。人く／＼のものの言の余情、事／＼に言語の「急緩の変」あるもの也。文章を書も、又／＼かくのごとし。顕はれざる内に「意味の変」あるもの也。意味なきは文章にあらず。俗談平話も文につらね、筆に書事も皆言語の急緩あり。故に句作も文章の余情を専と教る也。翁時代、湖南の句に

蕩の葉や残らず動くあきの風

是を翁の「余情なし」とて難じ給ふ。孟子も「知言」の自慢、是を自慢せること『為弁』に出づ。猶、此弁は『為弁』に明らか也。

○言語変 その詞は悪なれども、其ことばのうち善ある物なり。又其言葉の表は善なれども、内に悪有もの有り。其詞の意味を考、善と悪とを知るべし。『是「聖」と「佞」との差別也。是を「変を知る」といふ。『為弁』に委し。又、善変じて悪と成、悪変じて善と成。夫に驚かぬを「変」といふ。蒲三河守範頼の曰、「人は常にさかしらるを思ひて、朝夕に氣遣ふべし。上に聖なく、下に賢なき世は、一言の下に万代の功をむなしふするもの也」。

『説苑』、楚昭王召_{シテ}孔子ヲ將_三使_レ執_レ政ヲ封_{ルニ}以_二書社七百里_ヲ。

子西曰_二楚王_一。

視_{為弁}・觀・察 目に見る処「視」、心にみるが「觀」、見ぬ所を押
て見るが「察」なり。

○道理には善と悪あり 可尋。大かた本文にて見え候得ども、又君父に背かぬの記にて見え候へども、道理の内には善悪の二つを含む。

理屈は一句にあしき₄₃もの也。道理と一つに並ぶものにあらずと也。

○君父にそむかざる おのれが十分の道理を以て、君父をいさむ。君父うけざるときは、から従してしたがふ道理なり。ざるを請ざる
とて恨む、是道理の内の悪なるもの也。恨み劫する断言、あらがいにもなる也。則理屈也。故に道理の内に悪なる物有とは此事なり。楠正成、是道理也。上杉憲実、是理屈也。

○道理は天 天の自然なるものなり。

○理屈は人 人慾の私なり。

○訴状 説の差別をせんとおもへども、理くつつよき事、つめられて成がたく、奉行・頭人も憎むなり。

○俳諧は『論語』の助語の余情を考え、『莊子』の物の形_ヲ容を学んで、例のおかしく、例のさびしく、人和の道理をもつて。

○おかしみこそ 其諷諫を行ふ時は身をかため、実を以て身を捨て風諫す。故に大名・高家も感動して交合也。常の人がうかくと本文の如く事を行ば、車裂に成なん。されど心に実勇をふまへて、「信」の一字より言ふゆへに、上も感動有もの也。

○首を切られず 張儀・蘇秦が類、儒者は呵れども、我家にては言語のはたらきある故、誉る也。戦国の時よく虚実を取説もの也。

○靈運 『南史』_二、「謝灵運幼_{シテ}穎悟文章之美。与_二顔延之_一為_二江左第一_ヲ。世称_二顔謝_一」。

『徒然草』に、「靈運は法華の筆_ヲ受なりしかども、心常に風雲のおもひを觀せしかば、惠遠、白蓮社の交りをゆるさざりし」。人和の下手なる処あるゆへなり。

○張儀・蘇秦 能虚実_ニに明かにして、一言に国を合せ、一言に国をわ

○仁勇 『論語』に言、「智仁勇の三徳は天下の達道也。」

○文 詩歌・管弦。「武」は諸礼・干戈・軍術。「武」は実也。「文」は虚也。俳諧に三徳の智は、よく「変」を知て計らふ也。仁は「談笑の和」を扱給ふ。「勇」、よく物の差別をわくるを「40いふ。「頓挫」也。静なるときは仁、動くときは勇、仁勇一体に立置。『論語』

に言、「仁者能愛於人也。能惡於人」。よく其仁を忘る時は其勇行れ、勇斗にて仁は行はれず。一步百里の違に成也。されば「文」の一字を知らねば、「勇」の道は立られずといふ。「文」は智也。孔子も文王の「文」は誉給へど、武王の「武」は誉給はず。「然らば俳諧は談笑をもつて立れば、仁ばかりにて立べし。しかるを頓挫といふはいかん」。答曰、「仁斗にては文のみにして、教なき也。「虚実」「言行」等しからんゆへに「和説」有、「頓挫」有り。俳かいの家にては、別て言語の急用を扱ば、仁勇を兼ずして叶はず。しかし仁勇を内に包み、殊に勇を鞘に納置也。是人の常のかたち也。可知。例しては真草行、是又、智仁勇也。」^二

真 象潟や雨に西施がねぶの花

草 いざ、らば雪見に転ぶところまで

行 振うりの鴈あはれなり恵比須講

真の句、豎題なるべし。詞書もなく題を讀入て一曲秀逸、さび細み等備りたる句をいふ。『滑稽伝』に「一代の秀句は題をあらむべし」と書り。真の発句の事也。横題にも真の格有。是、行の真なるべし。真の真、行の行あり。

行の真 振うりの鴈哀なり恵比須講

行の行 恵比須講酢壳に袴着せにけり

横題なれども、前句は翁の本情より出て正風至極也。この哀を見出されたる真なるべし。後の句は流行して夷講一体を興じたり。

是行の句なり。草の格といふは、題を不撰、「41季節を入れる、斗に言流す。句の働を不構、其場を題とす。秋の海、春の山、題ならぬ季節いか程もあり。文章のとまり、皆草なり。

△連は○仁○文○君 △俳は○勇○武○臣

○俳諧の仁「人和」を扱ふとて、ぐにやぐしたる「人和」にあらず。俳、勇を行ふ時は、攀會ハンクハイとなり、仁を行ふときは張良となる。柔弱の事にはあらず。夫と是と和合させる「和」なり。

○本より詩歌 詩に起つて歌に和らぎ、連俳は詩歌の枝葉をつくらう。連歌の形は「文」、俳かいは愚なるもの也。是を可考。猶曰、心は詩歌連俳同し事と也の通情を知つて、姿の高下を慎み恐るべし。『為弁』に曰、「詩歌は俳恐るべし」とは、詩歌の家よりは由断せず、恐れよと也。されど其像の詩歌より^二次に立て、面の及ばざる事を知るを、俳の遠慮といふべし。

『白馬』曰、かたちは詩歌連俳の次に立て、心は詩歌連俳の一変の道を知るべし。詩歌連の家より出てその位は次に立とも、氷の水のごとく詩歌の道理をもどく処を「虚」といふ。詩歌の次に立は「実」、是をもどく、「虚」也。詩歌の次にたつ事をするは「実」なり。

○紫朱 故事古語のとり様、句作には『東西夜話』を見るべし。

○建立 歌連歌をなじつて俳かいの「虚実」を立る。是一門建立なり。

○此徳 とは、はるかひなり。

○夫を諷は 道理を以て理屈をうつて、文章は本より言語なれば、物

○言語の理屈を 俳諧の言語の三句目も、翁の前迄は只景物ばかりに
てい、流したるを能事とおもひしが、今こそ誠の俳かいの姿情備
はり、「投子可^レ惜」の如く、趣向は前句の噂を離れ、前句の外
の姿を見つけ、句作は前句の用を尋て、前句の内の情を結ぶ。是
はいかるのはこび也。森羅万象茶碗の内にある道理也。色と心と
は一双のものなり。

○可惜一碗の茶 『碧巖録』 此内にはまだ、理屈有とて其理屈を
い、立、い、つめて能此利を学べといはずして、「³⁸「おしむ」と
は誠によき付流し也。下手は是に其理屈を重て、「かやうの道理也」
とてい、合べし。上手は発句に「森羅万象」と虚を以ていだせる
所を、亭主が理屈を以て「いづれの処にかある」と脇を理屈につ
のり掛たる時、此理をもつて「爰にあり」と争へば、理屈にりく
つを重るゆへに、そこを附流して平話に落し、「おしむべし一碗」
とすらりとやられたり。俳諧も又く如此となり。

聖武皇帝東大寺御建立有て、三面の僧坊に学問する僧を、夜中
に田舎の夫の形に御身をやつし、蓑笠着てみそなはしめ給ふに、
或僧「明日より後は何とすべき」と悲しむ者あり。視て其故を尋
給ふに、「鮭の頭をねぶりく^テて学問仕つるが、ねぶり尽せり。
故に斯のごとし」と。鮭は眠りを覚す能あり。是を聞き召て、越
前鮭の庄を御寄附なさる。是僧は魚肉を喰はぬ筈の場也。是其理
屈をはなる、といふものなるべし。○新田義貞白旗攻の弁有べし。
○十年の死地 修行地を差す。縦年数によらず。一年の間にも十年有。
「死地」とは利屈をいふ。「活地」とは道理をいふ。十年の修行に
分別に分別を重ね。

○十年の活地 道理の無分別にもどりて、風月に遊ぶ。動かざる物を
「死」とい、うぐくものを「活」といふ。

うぐひすも海向ひて鳴く須磨の浦

といふ句を、「啼け」と直し給ふ。「なく」といへば「死」なり。「な
け」と言へば「活」也。手尔葉の同不同なり。³⁹

○一字の信 守る所が則信。あしたに思ひ、夕べにおもひ、意で相続
する所也。真宗念仏の如し。信とおもへば信にあらず。

あらはさぬ我心をぞうらむべき月やはうとき姥捨の山

西行

むかし麻苗うる者二人有けるが、一人は他国へ行て世に出、一
人は元のごとし。或山中にて行合、酒のなき事を悔み、麻なへ三
つ四つ打割て其酒を買ふの真実を顕はせり。別る、に及て其信実
通じける故か、解るが如く落馬して小袖ひた、れ等打よごせりと
いへり。是信の信なるものなり。

○俳諧の徳^ヲ

徳とは俳諧の行ふ処、顕はれたる徳の次第を述べたり。第二段
の「俳諧の道」には、「虚実の自在」より、世間の理屈と風雅の
道理に道を立、此段には其道のよつておこなふ所の、利屈と道理
の善悪より天理に随ふところ、則はいかひの徳たる事を述たり。
畢竟、道理と理屈をわけて天地自然にしたがひ、人理の私を捨る
処、則俳諧也。故に智・仁・勇の三徳を以て俳諧の徳と著はせり。
段々下に至て明らかなり。

伝曰

○頓挫 勇なり。きびしき事也。

○風雅 風は「虚」なり。雅は「実」なり。

○換名 かへ名なり。「虚実」の事也。

○六義の中の 六義の内にて風雅の名わけ出す也。

○爰に世上の 我家の俗談平話も心と姿をはなれぬ事を述べたり。

○天地の虚に起り 天地の間の無一物の所より、一物起る也。たとへ

ば火といふ。是則天地の「虚」より起りたる物なり。其火を「あかし」といふ。「暖か」といふ。是二義に算ふなり。其³⁶三に、

火を火なるゆへに「あかし」といふ時は、利屈にて又一物も生ぜず、跡へもどる也。爰を以、其三は大事にして其火をはなれて、「夜

とか、「道を行」とか用を起す也。一句の発句にする時は、花は天地の「虚」より生じたる一物也。是を「雪」と趣向を付るは二

義也。「雪」と「花」との用を以、その間より句作を仕立る所が其三なり。其三は際りなし。爰に句作は一字流行なる事を可味。

第三の事。

下闇を出て卯の花の月夜かな

ほたる流る、門の砂川

ひとりく長者の子供乳母つけて

又

山伏の山といつばや山ざくら

首途もよし野は花の雲

烏賊膾春のものとして白妙に

又

鶯の笠囉ふ日や旅すゞり

花にうかれた目を竹の宿

谷水も寛にとれば和らぎて

是「谷水を好む寛に受とめて」といへる句なりしを、夫では居所の体慥なれば、三句に渡るとて谷水の噂になし、居所の体を離る、

故、右句に直れり。

又、五脇の事

打添 空豆の花咲にけり麦の縁り

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

相對 忘るなよ秋に蝉なく嶺の雲

時人

廬元

呂柱

弁』に委し。

○諷諫 歌道に俳諧有事も如斯。臣も子もみな俳諧の像のたとへなり。

○天下一助 口伝別記有。先師の任のおもき事、『為弁』に出たり。ウ

故に此製作、翁の直説也と心をふかめ、可見也。蜀簡擁酒道具の

法度の時、罪に逢の者有しを、「男女同道してその前を通りしは、

無礼の道具持し故、是も切らん」と蜀帝に申上しかば、則酒道具

隠したるものも助かりしとなり。是「虚実」、「諷諫」の上手なり。

○俳諧の人は 俳かいをする者は、万事に行渡りて知り尽す。たとへば、事は得ずとも理においては至れるなり。

○向上の一路 万物一如と見てたどる所、則「虚」に居る処、爰に「実」

を行はざる時は、老莊の像に似て、心高遠に行過るなり。「実」

を行ふが心の手綱也。○『徒然』にいへる竹林院入道左大臣公衡

公のごとき、大政大臣に登り給はんを一のかみにて出家し給ふ事、

是らや向上に登らざるい、³⁴ならんか。
草の葉におくしら露の心もて
おもきは落る人の世の中

雲を卸りて遊ぶは安し花に鳥

里紅

是向上のしめしなり。

○人を損する 心が高遠に成てあらぬこゝろにもなる也。「孔子作二

春秋」一。知レ我罪レ我春秋歟」の詞の如し。司馬遷報任少卿書に言、

「猛虎在^ル深山」百獸震恐^ス、及^テ三^ニ其在^ル檻^ニ、^ニ搖尾而求^レ食^ヲ」。

○老後のたのしみ 若き時に俳かいの其高遠をたのしめば、家業疎か

にして家を崩すものなり。故に若きときは大低^トにして、老て家業

をはなれて楽しめと也。然れども、「若きときは是をするな」にて

はなし。人、家業のひまに心のたのしみなき時には、かならず悪

道に行もの也。つまる^ウ所が高遠の俳諧にふけらせず、其業く

の実を大切に行はせて、彼「和して流せず」といふ処にて、玄妙

は老後に味ふべし。此口伝に、古今伝授四十未満の事有。其老後

といへるは人に依てかはるべし。老後とて老たる斗に非ず。行有

余力則学文。

○およその人 老後といへるを妓芸などのやうに心得、かろくと聞

過す者も有べし。さにはあらず。老後と言にはふかき意味あり。

○物の始終 前の「先後」に対す。世命にて論ずれば一生の「前後」有。

一時の「始終」あり。一息の「始終」有。遠きに近き有。行にと、

まる有。物として「始終」なきはあらず。其若き時、琴三味線に

遊びてうたひたのしむといへども、老てその楽み³⁵には交はり

たく、世上に対してならぬ也。爰を以其「始終」「前後」を考て、

若き時より余力を見て仕覚え、老ては俳諧に心をしづめよと也。

放心を求る事を求め得ば、その人たとへ若くとも老人なり。是は

いかいの道を得たらば、たとへ若き人なりとも老人と同じ事なり

とぞ。『古今』の伝授四十未満ならでは成がたき習也。されど定

家脚は十五にて伝授なされしと也。爰を以、人による事を知るべ

し。

○中は人間 「虚」^虚を行ふときは子供も抱かれ、怒るときは鬼神も恐る。

然れども、「中」を行ふとて「中」に拘ればあしく、自然と「中」

に叶ふやうになる也。○彼田村將軍の伝にも、愛する時は嬰兒も

なづき、悪むときは鬼神も怖る。畢竟憎愛は「虚実」の像なる物

にて、「虚実」を胸中にと、めずして行ふ也。ウ入用のとき出すな

浦山も花の次手に見てまはり

誠マコトに明日は衣がへなり

は無心の名人の場也。「明日は」といふ所より此句春季に用たる、
我もしらぬ天然なり。

○淵明 姿情をとゝのへ、花実の情をあらはす。

○万葉 今の口上書に等しく、其中に人麿大明神、顕然として「ほの
く」との歌有。『万葉』と『詩経』と対せり。『古今』の序に、「神
代は歌の文字もさだまらず。すなをにして」^ウことの心もわきがた
かりけらし。人の世となりて花をめで鳥をうらやむ」と在り。又
『古今集』「真名の序」に曰く、「至如難波津之什献天皇、富緒川
之篇報太子、或事関神異、或興入幽玄。但見上古之歌、多存古質
之語、未為耳目翫、徒為教誡之端。古天子、每良辰美景、詔侍臣
預宴筵者献和歌。君臣情、由斯可見、賢愚之性、於是相分。所以
随民之欲、扱士之才也」。是則、貫之が風雅花実をひろむる所見
つべし。又『詩経』「朱子が序」のことあり。

○十知上手 歌にては貫之なり。○子貢 齊、田常が魯を討つ
時^{可尊}。朱程の二学士より、段々『史記』などを評するとして大史
公を「非也」といへり。是みな³²宰我・子貢が言語の「変」を、
彼方の実学にあひがたきゆへに、己が得手勝手に評したる也。

○花実 「意」に詠を「虚実」といふ、「文」に詠を「花実」といふ。「花
といふは「姿」、「実」といふは「情」也。

○十哲 口伝。家くにて人かはる。

○俳諧をとかず 人、「はいかいは何の為ぞ」と問へば、只「俗談平
話をたのしむ」と斗の給ひて、終に俳かいの為を説かず。

○俳諧のはこび 一二三 伝の所に弁あり。

○幻住菴 『猿蓑』に出たるは「記」なり。「賦」と二通り有。

○山家集を

中くマに時くマ雲のかゝるこそ月をもてなすけしき也けり

西上人ウ

雲おりくマ人を休むる月見かな

翁

此句にて西行と同意を見るべし。

○衣食の産 柿の衣を常に着て居給ふよし。

○椎葉杏花 逍遙の姿を書のべたる也。是らは文章の「鼓舞」といへ
り。唐土にては酒屋多き所を杏花村といふ。日本の伊丹など同前
也。都て酒の名を杏花といへり。

○生涯の計 『古今』の「真名の序」にも書る。乞食の客は活計の中
立とするといへるたぐひにて、又「北山の移文」の類に似たれど
も、さにはあらず。翁は衣食にも乏しからねども、態と寂を好給
ふ。『文選』ニ「毀^ツ彦倫之偽隱^ヲ而書^ス北山之移文^ニ」。祖翁の食帛
に乏しからぬは貧閑を作るに非らず、と前文を註せし也。彼後漢
の龐徳公、居^マ岷山之南^ニ。平生不入城府。劉表問て言、「先生
肯^テ不受^レ宦録、何をもつてか子孫に遺さん」。表言、「世人遺^レ之
以^レ危^ヲ。我は遺^レ之^ニ以^レ安^ヲ」といへる心ならん。

○例の淋しく 其人く相応くマのさびしみ有。さびをさびしくい
んと思はゞ、質素の事にして、富て奢らぬといへる所也。貧にし
てたのしむ也。

○こゝろの遊び こゝろの寂を。

○理をほゞき 皆我が俳かいに合して、むすほふれる利をほゞき。『為

駿河なる不二の煙りの空にきへて行衛もしらぬ我おもひかな
西行法師

俊成卿、「風になびく」と直し給ふ。西行の「駿河なる」の五もじは名人の場也。俊成の「風に靡く」は上手の場也。「するがなるふじの煙」とすらくと言、流して、「ゆくへもしらぬ」と作を入れ玉ふなり。然るを俊成卿の、作を入れて「風になびく」とし給ふには、作に作の重なりて面白過る也。又歌五文字にも君臣の義有。「風になびく」等といへる五もじ、是臣の五もじ、五句にわたりて一句を莊嚴する所、是上手の場也。「駿河なる」とは君の五もじにして、物の姿を立さまにういへる所、是名人の場也。君の五文字は動かず、臣の五文字は動く也。外の歌も是にならへ。

翁の「古池や」といふを、其角に試みに尋給へば、「山ぶきや」と置り。是上手の場なり。作に作のかさなるゆへ也。名人は一句の趣向を見出してすらくといい、流し、其作を一作に調ふ。然らば、世上皆名人がよしといはゞ、さにあらず。自ら名人にならんとて好でならる、物にあらず。上手あれば名人あるべし。是は私として叶はず。天より授かりたる所なれば也。然れども、名人の理は如此、上手の利は斯のごとしと心に得と工夫して、句作をしつて其上に上手の場に居るべし。自然と名人の名の授も有べし。されど名人にては其道弘まらず。上手にて広まるなり。其名人の句を誉め、その道を行ひ、其法を広むるが上³⁰手の業也。

今の世の人は、みづから名人の場を得たりと自慢する事、是大きに誤り也。天より授かる名人の場を、なんぞ自知る事あらんや。

自句をなしても心に足らぬくとおもへども、後に人があらはす也。名人の利は斯のごとし、上手^(兼)の利は如此と、心に納得して居るがよし。自らほこるは他流の有様也。上手といへども名人の句をする時は、一体変じて名人也。名人といへども上手の句をなせば、全く上手也。此故に「名人の場をする」の、「上手の場をする」など、て、みづから工んで句を自慢するは大きにあし。名人、上手も人によつて天授あり。句をなすにも流行の新らしみは其日くくに天授あり。されば『莊子』にも「今日之隠^レ凡人者、於昨日之隠凡人者也」。是心の新らしみ也。きのふの晩に来たる人も、今夜来れば体はかはらねど、心はうかはるもの也。日くく新らしみに成る也。天地草木一切国土みな天のなせる像物なり。是を見出すにも私のちからに非ず。天のなせる也。一句妙句を言はゞ有難しと、心魂に徴して天の授けを悦ぶべし。是を「我が発明述作なり」と自慢するは、「虚実の中立」に背く也。「古池や蛙飛こむ水の音」、是、飛込道理は天地の像物也。それを翁の見つけ給ふといふ事、是天の授なり。述作を天よりなして見せ給はずは、何ぞ自蛙を飛こます事あらんや。是を考て、必みづからほこる事無き時は、名人の場にちかし。能句の趣向も、句作ともに天地にみちくたれども、得みつけぬなり。

八九間空で雨降る柳かな

はせを³¹

老の名のありともしらで四十雀

象潟や雨に西施が合歡の花

行秋の道くこぼす紅葉かな 乙由

附句に名人の句、先師北国行脚の時

天言、「富貴しても又苦み有。苦は心危変に在り。貧残にしても又楽みあり。楽は身自由にあり」。富を以富貴²⁷にしても、其の淋しみを忘れざる時は、何ぞ楽しみを千歳に伝へざるべけんや。『徒然』にいへる「上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべき」云々。これらやさびに近かるべき。

○世上変 前に弁あり。為房卿の事。

○吾翁 俳諧は天地開闢より人に具してあり。其名は『史記』に出たりといへども、今迄の俳諧は皆口先ばかりにて、「天地の俳かい」を得ず。故に「心の俳かい」を伝へず。今迄は俳諧の祖と立べき人なしと也。『葛の松原』撰集の時、他人の誹諧の是非を論じたる事をしかり給ひて、「古人なし」と書ける所をとがめたまはず。爰に師資の意通を知るべし。^ウ

○俳諧の詞の比興

○俳諧の心の風雅 口伝別記有。

○俳諧の詩歌 詩歌連俳と四門を立といへども、同じ一筋なるもの故、連に俳あり、俳諧に連歌あり、歌に俳有。はいかゝるは中品以下とおしへ、中人已上は其中に籠て合点せり。是「下学にして上達」の言なり。『為弁』に、「清輔のいへる『古今集』は多く俳諧体」ともむべなる哉。『古今集』は花実相応の集と歌仙達もいへれば、猶其清輔の多くはいかゝい体と云る事も可信也。花実相応といふときは、歌も俳諧も心の道理に違ふべきやうなしと也。口伝に曰、「杜律」にては俳かいの詞の拵様を知り、『山家集』にては心の用ひやうをしるべき也。是則口伝也。故に『杜律』は詞の鑑といひ、『山

家集』は心のかゞみといふ也。

又曰、我家の²⁸俳諧は、言葉は古き比興を用ひ、心は新らしき風雅をたのしむ。よく聞へる所をもつてこそ、天地感動すべけれ。きこへぬ事に天地なんぞ感動せんや。故に我家には『杜律』・『山家集』を用ゆる也。何が故に用ゆるなれば、第一手尔遠波の扱也。我家の流行も一字のてにをはにあり。よく『杜律』の詞の扱、『山家集』の心の扱、是をよく考て見るべし。趣向は万古不易にして、句作は一字流行也。

○杜律の詞『為弁』に委し。態字に妙を得たり。

○西行の歌 山人に花咲きぬやと尋ぬればいざしら雲とこたへてぞ行へる、^ウ是雅言也。則発句の「剛柔」也。発句も又々斯のごとし。例の俗中に雅言をもつてなすといふ、是なり。「いざ白雲」と言る処にふりむける姿をみるべし。我家の姿を先とする事、像物にかざらず、言語の内に姿といへる事有。秘蔵の詞也。あらはに語るべからず。此一首の歌にて俳かいの句作を貫くべし。

○手尔遠波 漢文助字に「緩急」の義有。いわば「是ぞ」といへば急也。「是ぞや」といへば緩也。音韻のひゞきに、「釈迦の」といへば愛の詞なり。「孔子が」といへば憎の詞也。手尔遠波の一字の扱より、雅とも俗ともなる也。又はよき句もあしくなり、あしき句も能くなるは、てにをはのあつかひなり。

○名人上手 上手といふは、連俳ともに彼風景艷色をかざり、²⁹言葉のつやに遊び、或は作に作を重ね。名人は姿情を分ちて、只一字の信に遊び、たゞ一作の妙字をたどる。

に向ふかたちなり。

○さびしきは 茶を好み数寄をなすにも、大名に寂を教へん為也。歌に山家海川の題を出し、山の奥、海の末迄題を選らぶも、民百姓、木樵、海人のくるしみを上々にしらしめんが為なり。『為弁』に「人のこゝろのたつか弓はられてはり返すは俗家の法也。あさ田の水鶏の物さびしくたゝかれて啼は雅門のさびなり」。ものゝ、淋しみに感^カ動せざる処也。よくく味はひ、此文に先師のこゝろ・詞も、こぼるゝ、如く有る也。されど淋しきとて、

さびしさに宿を立出ながむればいづこもおなじ秋の夕ぐれ
此淋しきには非らず。古詩に

山^ケ経^キ過^ス 満^マ徑^キ 跡 隔^ワレ 溪^キ遙^ト 見^ミ夕^ス陽^コ春^ト 往^キ昔^キ諸^ク葛^ト

為^ニ何^カ事^ナ 唯^ニ終^シ身^ヲ可^シ 為^ニ臥^シ臥^シ龍^ト

又、伊達政宗、松嶋瑞巖寺建立後、上州物外和尚を招き給ふ。辞して其使者に一首の詩を渡し給ふ。

森^ニタル 隱^ニ処^ヲ又^ニ何^カ隔^リ 花^ハ与^レ御^ノ苑^ニ紫^シ紅^シ岡^ト 七^シ尺^ノ烏^ノ藤^ノ臥^シ

是らは寂然の姿にして、是斗を淋しみといふにはあらず。物^ウ寂然たるばかりを、さびしみといふにはあらず。光明皇后の御筆にも「清貧は常に楽み、濁富は常に憂」といへる、この御詞ちかゝるべし。たとへば瘦たる法師を大力の者扣くときは、其法師いかなる無理あれども、必其法師に憐つよくなり。爰にさびあり。しほり有。「はられてはり返す」は、俗家の「売詞に買詞」也。爰に理屈の生ずる所也。「たゝかれて鳴く」とは、「弱よく強を制す」の道理也。彼仁勇を内に包む也。『為弁』に頼政の歌を出して、由井の

正雪、『平家物語』の批判に、「『身のなる果は哀なりけり』とは、『哀』にてはなし。『適』と評せり。頼政官をすゝめ、平家を傾けんとして、成らずして死す。何の適なる事あらん。頼政が為には至極哀なる筈なり。物体、詩歌連俳ともに「実」を以てする²⁶なり。されば此歌で評せば、「花さく事もなかりしに身のなる果は」と我身と木の実とを対して秀句にいへる所は、詞の「花」也。「哀也けり」とは情の「実」なり。それが「適」にて何の実なる事あらん。正雪、武は得たれども、文はなき者と見えたり。武有て文欠たる故に、ゆひかひなくも横死して今に悪名を残せり。されど「哀」を「適」とつかふ歌もあれど、此歌にかざりて「哀」とみねばならぬ也。是より「為弁」に弁すべし。

今日の人や、たとへば千重の羅綾を飭ればかならず心にも羅綾をかざる也。口に八珍をくへば、はや心に八珍をくふ也。今迄下部奉公したるものも、ひよつと番頭、或は足軽にもなれば、早はじめを忘る也。故に花身を遂ずして果す。是則、千重八珍にか、はりこるがゆへ也。たとへば竹の「節ある如く、其程を知らて、富限者の渋かたびら、是卑下のおごり也。貧者の白足袋、是貧のおごり也。身の分限を考へ、衣装をかざれども薦苧枚を忘れず。八珍をくらへ共、茶漬に焼味噌のこゝろを忘るは、風雅の寂也。『論語』曰、「子貢問曰、富而無驕、於貧而無諂、則如何。子曰、可也。富而好於礼、貧而不如楽」。その富にもこらず、其貧にもこらず。むかしを忘れぬ也。常憲院公御歌

草の葉に其ほどを知れ露の玉おもきはおつる人の世の中
「富て無驕」は茶漬に焼味噌也。「貧て無諂」は一瓢の飲也。楽

他の先後」を知るといふなり。是則天地に生じたるかたちなり。『大學』の序に、「或その氣質の受たることひとしき事あたはず」といふは是なり。又一言半句の内にて先後相違有て、一步百里の違有事は『百人一首』の歌に

つくばねの嶺より落るみなの川恋ぞつもりて淵となりぬる

我家の大事は、此「先後」をとくと工夫するを第一のおもとする也。「虚」なるが故「実」を生じ、「実」なるが故に「虚」を生ず。²³「先後」の扱ひは心の用ひ様にて、弁にも説れず。たとへ釈迦・孔子を拷問すとも、其裏はかへし給はじ。是儒仏にも説ざる急用なり。我家の学者達、此「先後」をよく考て、口に言出せば僥忽はなき也。中々弁を以て尽されぬ也。我このむ処を立れば、人が好ぬ也。是を無理に立れば理屈なり。なを其先始を知る事安く、其の後終をせる事得がたき物なり。能く、得て、其始より終を思ひ工夫すべきなり。孔明三国の事など語り有。

○三條法 『為弁』に委し。『白馬』「原道訓」に、孔子の七十二弟を扱ひ給ふ所を立ていへり。

○世上の人和 父子、親君、臣義、長幼序、朋友信の五倫の道理にかなふやうに行ふを、世上の人和と、のふといふべし。されど五倫の道を行ふとて、「是が義也」、「是が信なり」、とかた付いて行ふときは利屈也。是を和するに、親子打つれ花見月見に連立て、笑言をい、かたらふて睦しく、其ほど、の時宜に叶ふを言べし。口に背かぬを「諷諫」といふ。意にしたがふを「諂へる」といふ。いは、何方へ行べし」とい、かくるに、「いや」と言ずして畏て外の言を以て断を立るを、「諷諫」といふ。和調なり。又「い

づ方へ行べし」とい、かくる、「いや」とおもへども畏りて行く、是を「諂」といふ也。しばらくもゆるす時は、「諷諫」と「諂」と取違出来、道理、利屈に落る也。爰を以、是を能く考えて親子兄弟打交りて、句をなし章をなす。是「人和」也。きつと畏つてばかりが君臣の道にもあらず。嘘いはぬが父子の道にもあらず。花を詠、月を見、雪を踏むにも、その程よき所に叶ふを、²⁴五倫に叶ふとも、「世上の人和」とも、「虚実の中立」ともいふべし。又「ちらす」といふ事有。儒の「実」に偏らず、仏の「虚」にもなまず、儒仏老莊の間を伝ひて行く処を、「ちらす」といへり。口でちらすにあらず。心でちらす也。此ちらすといふ事大事也。畢竟是を神道にては「稜」といふ。仏道にては「止観の止」也。

しら雲に鳥の遠さよ飛ぶは雁 其角
是、作がおもく理屈なり。

鶯やもちに糞する椽の先 是なり。ちらすといふ事。巻にては逃句とい、発句にてはちらすといふ。

麻の見ぬ紅葉や藪のかくし裏 是紅葉の色をちらしたる也。

行く秋や色経た山を置みやげ
逃句 死なれた人の状の名をよむ²⁵

帷子もひねになりたる八九月

是、「かたびらもひねに成りたる」迄は前句にしつかりとからみ付たれど、「八九月」といへる五もじにて逃たり。

○おかしきは いは、滑稽の蔭室のごとし。口に省かずして人和を調ふ処には、必おかしみ有。諷諫也。たとへば面を和らげて人

伝ひ得て、「人和」といふ。爰を第二段の要と知るべし。かへす
 くも喜怒甚しければ、その甚といふに利屈有。甚しきをかひて
 能き程にするが道理也。いは、儒仏の両端をとつて其中を用る也。
 俊成卿の歌に

恋しともいわばなへとに成りぬべしこゝろをみすることの葉
 もがな

恋しいことを「恋し」といへば、利屈になりて浅く、文なし。
 可味。是らをしらずして「老壯の風あり」と云ふ。是ははいかい
 の道を知らぬ人のいゝなり。

○俳諧は理非 理があれども理をきびしくとりつめず、非があれど
 も²¹非を稠しく取つめず、其程よく取扱、是則、「中立」也。是
 を「理非を扱」といふ。

初霜や琵琶湖の調子かきさざし
 かさゝぎの橋の余りや森にこへ

風鈴や秋立日よりよみがへり

○虚実の変化 太田道灌 アシガナヘノラドルコト よく心に天地の
 「変」なる事をしらねば、きのふ親しみけふ疎ければ、甚うらむ。
 爰を我家には、天地の変化をよくしりて、親しきとて甚悦ばず、
 うときとて甚恨みず。天地の「変」は常なる事を観じ、世上の有
 様にまかせて行ふなり。

○一字録 東花坊述作。『孔子の家語』を本として書給ふ秘本也。²²

○時宜 天地の間より、又は時々節々一寸一刻、間に髪と入れぬ間に
 も「時宜」は有もの也。物に体有れば、「時宜」有ものなり。是
 は心にて考見るべし。「時宜」は心斗にてはつまらず。多く言語

にあるもの也。敬に有。人によるべし。

○先後 此「前後」といふは、獅子門第一の設也。物の好悪は一足の
 違ひあれば、『論語の先後抄』と云ふものを東花坊あめり。いま
 だ粹行には出ず。『為弁』には、「されば儒法には実の表をしらせ、
 仏教には虚のうらを悟らす」と云々。「虚」と「実」は一時に行
 はる、両翼の働なれど、言語に出していへば、「実虚」とか「虚実」
 とかいわねばならぬ也。あと先は言語の次第にして、撃石火、閃
 電光の間に不^レ容髪ともいふ也。然れば万事の表を師匠に習ひ、
 弟子はその裏をさとる。²²夫を自悟とも、自証ともいへり。しか
 るに「虚に居て実を行なふ」といふものにも、利屈にこるとあし
 きが故に、我家の俳諧には其心節を述たり。言葉の先後より、悪
 ともなり善ともなる也。一言半言の内にも前後相違の事あれば、
 一步百里の違もあり。故に此「虚実前後」と申が大事なり。

又曰、畢竟人の好と悪も言葉の前後より成る。うしろ合せのも
 の也。業平のうたに

おもふこといはで只にや止みぬべし我とひとしき人しなけれ
 ば

此方に好む事は、むかふに悪む。向方に好む事は、こなたに悪
 む。是「自他の前後」也。『小学』にいへる「至急也」といへども、
 人をせむる時は明らか也。悪明なりといへども、己れに許す時は
 くらし。人を責るの知をもつて己をせめ、己れにゆるすの知を
 以て人のゆるすとき、心は聖人の地位に至る。さる事を愁へず、
 日々に三度おのれを顧といへる心をもちて、爰に能く了簡して好
 事を尽すべからず。又人の好処をおもふて了簡して行ふを、「自

ふ。是をもつて『連歌無言抄』といふ物有。木食上人の作といへ共、太閤の御作のよし。『無言抄』を或は撰て、或は略して、『誹諧御傘』の式といふもの貞徳建られたり。此『御傘』の式を季吟伝へて、『埋木』といふものを立られたり。その『埋木』を塩梅して我家の「貞享式」有。今の『古今抄』なり。

○百人一首秘抄 『秘文抄』なり。

○古今集の名 『史記』の「滑稽」より『古今』の名を用て、強て俳かいと誹諧とに新古の名をわかち、論を立。い、立には及ばぬと云ん。けれども我家に天稟二道¹⁹を建立し、天地一体一道の筋を、古池の蛙に眼をつけ、姿情全備たる手柄をのべとる家の意地を伸る心をもつて、「俳諧の伝」といふ事を書出せると也。

○雲夢 胸中の広き所をたとへたり。

是はくとはばかり。花の。よしの山。
姿也 趣向なり

情之句作也 趣向也 姿也 姿也
いざのほれ。嵯峨の。鮎くひに。都鳥。

○信すべし 我家の一大事也。虚に居て実を行ふにも、「信」なければならず。「俳諧の伝」の内にては、「媒」と「信」の字を眼にするなり。

○天稟 とは開闢より此かた天より受得たるを、天りんとはいふなり。

第二 俳諧道 此論は専ら俳諧の道を述る所なり¹⁷

○世間の理屈 専ら『白馬』に説り。是に道理と理屈をわけたところ、はいかひの發明なり。

○道 道は情也。理は姿也。道は古今に通徹す。その道の起て行ふを理といふ。是を合して道理といふ。

道理と利屈の弁 喩へば、けふの雨を悦ぶ人もあり、怒る人もあり。その日くの様々の所為に依てなり。悦ぶも怒るも天よりなす所の己くが道理あるゆへ、理なり。其天より生じたる処の道理にげきして、めつたにいきり、めつたに悦べば、利屈に落ちる也。夫を考て心につよくとめず、能程にいかり、能ほどに悦ぶを道理といふ。されや、いかる時は人恐れてうとく、喜ぶ時は人なついでしたし。此を諷て、怒るにもほどよく喜ぶにも、程よく其中をとりて、「人和」をその人能程に²⁰するが道理也。是則「虚実の中立」といふもの也。此境は儒仏の説かざる処にして、たとひ名僧名儒に学びて道の高遠は悟るとも、世法に五倫の急用ならば、俳諧をまなぶにはしかざらん。爰が俳諧の手柄也。

流れても水にはならぬ柳かな 理屈也。

流れては水にもならぬ柳かな 道理也。

○心の天遊 老荘は寂然不動の先をい、「大道廢て仁義有」等とい、道の起らざる先を云へり。我家の俳諧は、道の起てはなれざるをいへば、大きに相違有。寂然不動の先をいへれば、仁義も理非もいらぬ筈也。されども妙々真々の老荘はしらず、我家のはいかひは、夫婦別、長幼序等の五倫を扱へば、何を老荘の道といはんや。しかれば我家の俳諧は¹⁷、儒・仏・道の其按排をさして、遠く儒仏の表裏をも知り、深く老荘の意地をも知りて、三道の糸筋を

それを虚実の弁には是と説がたし。

○虚実の二「俳諧の虚」、「連歌の実」、其家（ウ）の立様也。「俳諧の虚」あれば跡に「実」なければならず、「連歌の実」なれば跡に「虚」なければならず。

○媒 是、此段のまなこの字なり。我朝の貴ぶ所は儒・仏・神、就中、神道をもつて体とし、儒の「実」に偏らず、仏の「虚」におちず。其中をとつて行なふを、我はいかに立たる「執中」、「媒」の一字は爰なり。

○時宜 世上の時宜は、則「媒」の字也。一文字も引ぬものに俳諧の正意名人あり。百万句もなしても、心に俳諧の下手多し。句をせずして俳諧師有。「時宜」といへるは、君臣義有、夫婦別有、長幼序有、その「時宜」、則「媒」也。五倫の間にはさかるもの有。親・義・別・叙・信、これすなはち「時宜」なり。「中立」なり。¹⁷

○古実 『論語』「先進」篇、「魯人為_ル長府」。閔子騫曰、仍_ニ旧貫_一、如之何。何_レ必_シ改_メ作_ラシ。ないものを有といふを古実の法と言、国家の効也。たとへば、「鶯」の仮名を「うぐひす」と書がごとく、又禁中の年中行事は、八月十一日定考と書て、「かうちやう」とよます。是逆さまながら古実なり。『古今集』「真名序」撰基法師を「きせん」とよむことし。是古実なり。やはり俳諧も、古実にて「はいかい」といふがよし。近代是にいろくむつかしき義をつけ、利をもふけ、俳諧は何の反にて何とよむなど、『古今集』に利を付れども、無用の説なり。やはり古実と心得て「はいかい」とよめと也。

○抑 発語の詞とて事を出すの変詞なり。

○故翁 伊賀に四党の姓有。翁は藤堂新七殿家臣也。ウ私曰、乳母の子也。故有て十九のとし、身を退給ふ。京都に出給ふ時迄は家財も沢山に、家頼も余程召仕給ふよし。江戸にては小田原町杉風等が世話にて、三十三の時芭蕉庵に入庵、三十六ともいへり。『為弁』には三十六と出たり。然れども梅花仏、廬元坊へ咄し給ふは、三十三のよし。是正説也。子細有つて、『為弁』には三十六と出したり。言^(兼)（ホトケ）遍の俳集には、宗房とあり。桃青ともあらくみゆる。是桃地の心にて付給ふなり。

○埋木 全部沓冊俳諧の古伝也。季吟の俳説を松下元隣といへるものぬすみ、梓行せり。是に仍て元隣は季吟の勘当を受たり。其時節殊の外大切の物のよし、今は絶板にて急には見あたらず。しかし古例のもの¹⁸故、沓部は所持有たし。今は『古今抄』の慥なるものあればいらざる物ながら、持て居るがよし。心懸れば古本屋などにて見当るもの也。翁は寛文の中比、季吟より伝え給ふ也。

○古今序伝 二条家の伝なり。

○連歌新式 後宇多院御宇建治年中冷泉為相卿、鎌倉殿が答にて作_レ之。其後又大納言為藤卿被作_レ之。然るに後光厳院御宇応安年中、後普光園撰政殿良基公改作、是を新式と言也。其後又書加え給ふ。追加といふ也。奥書に「右大概准建治式作_レ之」云々。後花園院御宇享徳年中に、後常恩寺関白殿一条兼良公、新式今案をくはへ給ふ。奥書に「或以愚意料簡、又訪宗砌法師意見粗所記置」云々。又後柏原院^ウ御宇文龜年中、肖柏、応安以来の今案追加等を集て、猶了簡を加へ一冊とせられし也。本式といふは建治已來の式をい

○さて 前段をうけて 天地開闢より『万葉』までは、歌も俳諧もひ

とつなりしを、『古今集』よりこそ俳の名はあり。夫も文明前は、
唯い、捨にてあだ口にてあれり。それを山崎宗鑑、守武、貞徳、
望一——○夫も五十韻、百韻を立たる斗にて、口先にいへる
ばかりにて、俳かいの虚実はなかりけるを、其中に貞室、

是はくゝとばかり花のよしの山

いざのぼれ嵯峨の鮎喰に都鳥ウ

此二句にて姿情の兆し、少あらはるゝなり。

○宗因 古風の口先を打破つて狂言体を作つて、日本にひたして「皮
足袋もむかしは紅葉踏わけたり」など、耳に言語のおかしみは
得たれども、眼に眼前の姿情なし。

○おろかや今いふ俳諧は 爰が一大事の処也。「今いふ俳諧」とは、
我家のはいかい也。季吟は貞徳末の門人也。狂言体の末に翁御出
世なされ、此狂言体おもしろし。しかし「十年とは過まじ」と工
夫して、爰に姿情の誠を見出し、古池の句有。然れば、我家の俳
かいは狂言体と無法無主と違、其道は唐・虞の先にわかれて、其
名は斎・楚の後にあらはれ、姿情をと、のへ、天地を和する教と
なるなり。¹⁵

○唐虞の先 是『十論』の手柄。「先き」といふは、天地開闢までを
頭はし、先師の大的手がら也。然れども、翁の御存生まで古風の
口先残りてうせず。我道いまだ開けず。是を翁も悲しみ給ひて、
深川に隠れ給ふ時、「筏に乗りて」の歎息の詞も有りしよし。先
師も書給ふ道はしれども、御心のごとく道の行はれざりき。

○和漢一体 我國の俳諧は、神代の巻にわかれて、『古今集』の今に

あらはる。是を添えて見る時、和漢の一体なり。是『十論』の習
也。是を書残して隠に其心を余す。これ「文」の用なり。其言行
一合体にして、其道を得たるは、我翁なり。

○管丞相梅ウ

○法然上人夢 是皆自ら知にあらず。夢の師有て、教を出とする也。

我翁や、深川にて始て此姿情を見出し給ふ。上代の宗匠達も、近
代の風人達も、此発句の詞の出たる前後にて、終にいわず見付け
ぬ処を、「古池や蛙飛びこむ水の音」と風雅の魂を入れ、姿情を
つけたまふ也。事生智安行天の自然といはん天性なり。

○俳諧は不知 是は唯、言篇の俳諧斗に對していへる。余流の俳かい
はしらず。我家の俳諧は、常に知つてしらぬふりをするが習なり。

○元祖 洛東双林寺に立玉ふ碑の銘、長歌有。謎字なり。ひとつに合
すれば俳諧の元祖、「芭蕉庵」といふ字に成る謎字也。先師是を
立給ふ。¹⁶

伝曰

○儒仏 我家の秘書『一字録』に「儒仏の変」といふ事有。儒は「実」
を説て現在をいましめ、仏は「虚」を説て未来をおしゆ。『老子』
は道とはいわれず、天地未分の先を説けり。道とは勧善懲悪の名
人に從て行はる。俳諧猶人に從て行はるゝ教なれば、天地未分の
先に出べきやうなし。故に「俳は老莊の教に似たる」といへるは
誤りなり。宋の孝宗帝の詞『為弁』に出づ。又曰、『老子』とて
も「大道廢て仁義有」「道の道とすべきは、道にあらず」などと
いへるは、儒の「実」にこつたる処を打破る頓座の道理ならめど、

るべし。橋は通るものゆへ橋と出せり。

○伊奘諾 神書に委し。万物の父母なり。

○鶴鴛 男女和合のはじめ。

○天照皇太神 百王百代の尊神、弁に及ばず。

○虚実 「天地」ともいふ、「虚実」ともいふ。

○猿田彦 天孫日向に降臨の時、天の八ちまたに恐しき神有。供奉の諸神連申上ていへり。天孫天鈿女の尊を遣はして問給ふ。天鈿女は女体なり。能く人の和を得て優長なる神也。天照神岩屋に籠らせ給ふ時も岩戸の前にていろ／＼の神遊びして諫給ふ神也。又曰、猿田彦の形冷まじく鼻高く背高く等と恐しく書しは、是^ウ神代の秘事にして、魏^ミ堂と、人大勢つれて居給ふをいへり。猿田彦に、鈿女問答し給ふに、「天孫を待奉るなり。天孫は日向に降らせ給へ、我は伊勢に参らん」とて、天鈿女、夫婦になりて伊勢へ去給ふなり。

○俳優^{ウツヤク} 『日本記』に、「たくみに俳優す」と。わざおぎとは、わざおかしきといへる事也。天照皇太神、磐戸に籠らせ玉ふとき、諸の神達、岩戸の前にてさま／＼のわざおぎをなして、戯れたまひて、天照皇をいさめ給ふ。是、我朝の風雅のおかしみのはじまりにして、諷諫の根元なり。是は秘伝事なり。

○八雲 素盞烏尊、弁有べし。

○難波津の歌は 王仁が実を以、諷諫せり。

○浅香山 采女が「虚」を以、談笑せり。『為弁』には「奈良の帝に¹³うねめがたはむれ」と先師出されたれども、是は訳のある事にて、かつらぎの大若夷の不礼をとがめ怒り給ふを、「采女が談

笑せし也」と、立て置くべし。

○万葉 には俳諧の歌ありといへども、それもこれも合して歌と。猶や上代の人のこゝろ厚きゆへに娯情はかゝず。

○古今集 こゝに貫之これを見出して、俳諧体をわけてあらはし、今の歌の姿情全く備はれり。

○和歌の一体 「千早振」よりは是までは、前條の唐土のはいかいの源をあげ弁じたるより、「千早振」よりは、日本の根元を対句して、爰にて風雅の一体をむすべり。唐土の『史記』には滑稽の名を出し、我朝の『古今集』には俳諧の名を出せり。^ウ

○二名 順徳院の御自選也。『八雲御抄』には、俳諧 俳諧 滑稽 誹謗 謎字 空戯 鄙言 狂言 都て九体なり。かく九品、変名は『埋木』にも出されたり。此九品の中に「二名をあげられたり」と書たるは、俳かいとよむべき名二つ有ゆへに、九品内に二名とあげられたり。

○二條 冷泉 為家卿、御公達よりわかる道俊朝臣、『後拾遺集』に俳諧体を入れ給ふを、経信卿難じ給ふ也。すべて廿一代集の内、間／＼みゆる俳諧体、多く狂言体のみにて、此俳諧体入たるにて、此集の事知れたり也。『古今集』の俳諧体にあらず。其後の集にも、或は入らず、あるひは入とも、狂言体のごとく有て、「虚実の変」分らずかたづきて、『古今集』のごとくあらず。『前載集』^{ウツヤク}に俊成卿入れ給ふ¹⁴さへ、定家卿是を悔み給ふ也。

○法式にも 『古今抄』を梓行、すべて道理を含みて、新旧の口伝といへり。

○芭蕉家 我家の獅子門俳諧は、『史記』の滑稽の俳諧を立よ。

○酒桶コガネの喩。智弁疾出、畢竟説客也。弁説さら／＼と述に滞らざるをいへり。酒桶のせんを抜、花酒のさら／＼滞らず出るを言へり。「紛を解」のい、也。

○諷諫「人和」也。人の非を諫めんとて、直につよくさし留、異見するときは、却て其気色を破るゆへ、其人のこゝろをいから¹⁰す也。爰を以、そのおもひ立事を非といわずして、外の利を以是をいさめば、機に応じて諫事の機変に叶ふをいふ。「諷諫」則「媒」也。「滑稽」は「虚に居て実を行なふ」。「滑稽」「諷諫」は同意なり。

○俳諧 上品以上は、詩文金言を以ていさむべし。畢竟は「下学向上達」の謂にして、下々に風雅をしらしめんが為也。爰を以、みなもとは『史記』より書出して、末は中品以下に及ぼすなり。尚『為弁抄』に照し合せて見るべし。

○其道は「俳諧の道たるは、上開闢より禹・武に伝はりて行はるれど、其名は『史記』よりぞ顕はれたり」と、俳かいの伝とする所を書出したたり。

○虚は実を以 虚にかたより、実にかたよる時は、道行はれず。^ウ

○釈氏に達摩 『一代蔵経』七千余巻を説給ふを、維摩・達摩、是を破つて働給ふも、是、「実」こつて心にと、こふるを忘みてなり。

或は問、「父を殺し母を殺し成仏するや否」。答曰、「自己に反照して見よ。みづからかへりみよ。よきかわるきか」と也。此答を推て見るべし。大量なる事を孟子の「舜海浜にたゝん」といへる利屈を考見るべし。先師是を註して、「舜は然らば飢年の新乞食ならん」とのたまへり。

○俳諧機変 元禄本には、「周公はや、連歌に似て、孔子は諷諫の大祖たり」と。あまり過る故、梓行に出ず。仏家に禪法をせめぬも、

「虚実の道」を立るが故也。『論語』の二十二篇に七十二弟を説給ふも、門人の応気の¹¹変有て、「虚実の諷」を専らにし給ふ。仏また／＼かくのごとし。『孟子』「尽心」の扁、兆応が問に、孟子の答は利に遍れり。又孔子に宰我が問たる井仁の答は、是道理なり。実に実を重ねるが故に、利に落るなり。「宰我問曰、仁者雖告¹²之曰、井ニ有レ仁焉其レ從レ之ニヤ。子曰、何爲レ其然ラン也。君子可レ逝也、不レ可レ陷也。可レ欺、不レ可レ罔也。」兆応問曰、舜為二天子、皐陶為レ士、瞽瞍殺レ人、則如之何。孟子曰、執レ之¹³而已矣。然則舜不禁乎。曰、夫舜患得而禁之。夫有所受之也。然則舜如何。曰、舜視棄天下。猶棄敝屣也。窃負而逃、遵海浜而処、終身訢然、樂而忘レ天下¹⁴。孔子、長沮・桀溺をせめなじり給はぬも、虚実の二変¹⁵自在を得給ふ故なり。塩谷師直が弁有べし。山名播州満幸が臣。

○詩歌媒 是『十論』一部の体、俳かいの本心なり。儒家所謂、「実虚」「正権」の「権」也。執中の心をと、両端をさして文の字なるが故に、詩歌の媒とはいへども、詩歌斗に非ず。天地万物の中をとる也。いはゞ詩歌の中を行ふなり。

○千早振 是道は唐土の俳諧滑稽の源を記し述也。虚実の機変を普く出し弁じたる所の対句に、是より我朝の俳諧の伝とする証を出せり。「千早ふる」より「和歌の一体」といづるまで、今迄弁じたる『史記』に出る所に對句して、和歌の伝を出せり。¹²

○天の浮橋 「の」一字に天地ひらくると、古今に通衢する道有と知

防がんや。九雀臺にては敵をふせぎがだし。」と申上しかば、宗王爰にて甚感じ給ひ、則九雀臺を止め給ふと也。是「諷諫」なり。則「虚実」なり。滑稽の人七八人の内なり。

○或とし 和文の法。『源氏』にも「いづれのお、んよ」とい、『伊勢物語』の「むかし男」の類。発語覚束なく書こと、習なり。法なり。」

○芭蕉菴 是は深川なり。杉風等が捨て翁を入れ奉れり。

○茶話禪 獅子門の秘書なり。梓行にならず。俳諧の録なり。

『為弁』曰、「婆子焼菴」。是は禪家の話則なり。『碧巖集』に有。

「娘子曰、正与磨時如何。僧曰、枯木寒巖敢無暖氣」。是は娘子が庵を立て僧を供養せしに、「僧さとれるや、悟らずや」と後より抱かせて、衣の間をさぐりて此間をかけ、斯くしてこゝろみければ、僧の答、力味有。暖気あるゆへに、りきみあり。是を聞て、婆子庵を焼て、羅漢を追出せり。誠の力味の離れたるは僧正遍昭が歌にて、道心堅固なる事をなすべし。

僧正遍昭が石ノ上寺にありと聞て心みんとて

よみてやりける」

石の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我にかきなん

小野小町

返し

世をいとふこけの衣はたゞひとへかさねばうとしいざふたり

寐ん

遍昭

右僧のい、し枯木寒巖といへるを、娘却而婆子に語りければ、

「三十年來此賊を養得たり」とい、て、忽其庵を焼て追出せり。

爰を以、「婆子焼庵」といふ。字面を申さば此通り。俳諧にては、先づ是禪家にてはむづかしき事とぞ。「三十年來此賊を養ひし」と云て菴を焼たるゆへに、此俗となる。此僧さらば情慾の心を発したらば焼まいか。夫は猶焼く。しかれば、どふ云ても焼く。やぐがゆへに婆も也。弥陀の本願は、提婆が悪にて顕はれ、此僧も眼なきゆへ、此俗あらはる。然れば此僧をも捨てみぬ。しかればことの外、世俗の事は言説に乗せて説れませぬよし、釈尊も世尊不説の説、迦葉不聞の聞と申事が御坐つて、とかずしてとき、聞かずしてきくといふ事なれば、言説に乘らぬ所が則、俗と申すものでござる。そふに御坐る。

○論語述而『維摩』ともに附録に委し。しかるに『論語』の緩と違ひ、『十論』には対問の詞の端的なるは、和漢に生質の「急緩」とい、連俳に風俗の「強柔」といふべし。

○桃紅李白 附録に出たり。夏炉冬扇に対していへり。

○かずまへ かまはぬといふ事なり。

○朝暮三 翁の従者小使のわらは也。人に名の出ぬものなり。故有てかくのごとし。多くは作り名也。

○第一俳諧伝 我家に立る俳かいの心法を立る所を書出せり。

○滑稽 昔唐土には、諫官の内に滑稽人といふ者、朝廷に有。

○史記 齊・楚・秦・漢までに、滑稽の名の有もの七八人の言行を出せりとなり。四世の間に東方朔等が類、漸七八人みへたり。

○太史公 滑稽を賛していへり。司馬遷。

て奢らぬ道なれば、義なく信なくして行ひがたし。おかしきは人をして倦せず、人とあらそはぬ事なれば、智なくしていづくんぞ悟ることあらん。是を扨戒律にていはゞ、ちかく五戒の耳近きにて、是を述るに和を以て道を行ふもの、なんぞ生類の命をとる事あらん。淋しきを好むもの、無用の用を楽しめば、是又盗人むさぼりの心あるべからず。むさぼらざれば、妄語もあらず、毀語もあるべからず。おかしきを悦ぶものは、其姿つころはず、いろどらず、邪嫉の悪事あるべからず。爰をもつて我俳諧をなすもの、教へずして自然とその道に叶ふべし。其巨細は、段々「道德」「虚実」の所にて伸べし。

畢竟は儒は現在をと、なへ、詩書礼楽の文章を説、仏経は未来をいましめて、殺盜嬌妄の教戒を授けます。偏に花と桜とのごとし。名はかはれども体はひとつ也。けれども家を立る意地にて、「儒文」とい、「仏教」と申ます。しかれば文章には虚を飾り、教誡には実を直せば、文章は衣冠正しくして世上に威儀を調ゆるごとく、教戒は赤裸にして世外に因果をしめす。文章と教戒の先後の事は、今迄此塩梅の事は三家とも説ざる所を、はじめて俳諧に發明せり。

文の広太なることは、かの匡人のくるしみに「天之未_レ喪_ニ斯文_一」。

扨禪家の話則に俳かいのはこび有といへるは、「ウ何を以いふに、前條にも申ます如く、余流はしらず我家の俳諧は、初一念の趣向を立、無念無相の場よりうかみ出しますれば、爰に此作をと、自己の利口をはたらきませず、天地造化の姿より句作ります

る事なれば、自然とうかみ出所は、則言絶の絶たる場所にて、「話則」とも、「破顔微笑」とも、扨は「一貫の唯」とも、名はかりますれども、其教はひとつ也。自己の作に作をかさねまする句は、天地造化の句にあらずと嫌、しぜんと造化の姿を申まするを、秀逸とも絶章とも感じまするなり。

諷諫 むかし、唐の聖帝の傍に諫官と申官十人程あり。或は、真官、勤官など、いろ／＼ありて、いづれも帝へ「いけんを申官也。然るに滑稽と申は、十官の名の内一人の名なり。是を諷官とも申せしと也。ある時楊玄琰といふもの、娘楊妃、世に双びなき美人にて、近き内に寧王のかたへ召る、よし、玄宗皇帝へ申上しかば、「さらば盜とれ」とて、高力士といふ者うけ玉はり、途中にて是を奪ひとる。楊貴妃、則是也。これを記録所の諫官、「何の年月何日帝か様／＼」と書記したり。玄宗是を怒りて、早速誅せられぬ。又跡に諫官を立給ふ時に、後の諫官も、「帝が様々の次第を書留し故、諫官何がし切られし」と記せり。故に又切られたり。三人目も同じく右の事を書記せしによつて、「扨は是らが役目は此通りのももの也」とて、却て褒美を下されて、則合官は肯たり。ウ人を諫るは是也。是則、真諫なり。

楚莊王、孔雀臺を作り給ふに、諫る者は皆仕置にし給ふ。或時孫東といふもの、王の前にて玉子を九つ重ねるに、ちつとも動かずといへり。「しからは重ねて見よ」と被仰しかば、則九つ重ね上たり。其時楚莊王、「扨危き事なり」と宣ふ。その時孫東申けるは、「是より危うきは孔雀臺なり。金銀のついへ、町人、百姓、士のいたみ殊の外なり。もし他国より責来らば何をもつて

がら笑言をいゝかたらひ、睦まじく其ほどぐの時宜に「かなふをいふ也。されど「人和」も又、「諂」とまぎれる事有物也。是は本文にて断りませふ。扱は五倫の道を行ふとて、訖度畏りたる斗が君臣の道にもあらず。もの喰はず斗が父子の孝でもなく、嘘いわぬ斗が信といふでもなく、花を詠め、月を見、雪を踏にもうち交はりて、程よく時宜を取はからひ、おもしろく朝夕をたのしむを、「世上の人和」とも、「虚実の媒」とも、「風雅の一体」とも申べければ、第一に我蕉流には、此教へを立ましてござる。利屈には龍造寺隆信、赤星掃部之助が事。

第二おかしき「滑稽の蔭室」のごとし。口に省かずして人和を行ふ所には、かならずおかしきあり。諷諫也。たとへば面を和らげて人に向ふが如し。『史記』の談笑を家法⁴として言語の用に用を知れとなり。

鶯や餅に糞する掾の先
茸狩に鳥の守る弁当かな

夕顔や秋はいろくの瓢かな

文に書法にも、おかしきを書く『つれづれ』の鼎かぶりの法師のごとき。

第三さびしみ 風雅は隠者の真似なれば、猛将勇士の家にも茶人の寂を学べるが如く、弓馬の心を和らげんと也。あるは歌に山家海川の題を選らぶも、民百姓・木樵・海人のくるしみを、上えくにしらしめん為也。寂然の淋しきにはあらず。『為弁』に、「おかしみとさびしみとは、どちらも雅俗のさかひありて、人のこゝろのたつ弓は^{つらみ}られてはり返すは、俗家の法なり。あさ田の水鶏の

た、かれて啼は、雅門の寂也」。是按排をよく御勸弁あるべし。

心のさびは伊勢の御の歌

姿のさびはかはらけ味噌の事

尚奥に

檀の木の花にかまはぬすがたかな

いざ、らば雪見にころぶ所まで

夏来ても只一つ葉のひと葉かな

うらやまし美しふなりてちる紅葉

臘八や瘦は仏に似たれども

されや、頭には「風雅」といゝ、隠には「虚実」。是は是文章の花にして、文章は貫道の器なるを、世に文章くとして「つもの人」の淋を文章の体として、和節は風雅のあんばいなれば、酒しほは例のおかしみならんを、しらぬ人のもの書くも、心もとなき一つなり。爰に三條の証文を申さば、和節は『論語』の一貫なるに、かの匡人になぶられしさびしさも、子路をそやせし桴のおかしさも、夫らの対問は日夜の俳諧にして、都ては夫子の諷諫を知れと也。畢竟は孔子の「虚実」、釈迦の「善悪」、このふたつを和らげて其中にとつて行ひて行所が、我正風の俳諧なり。何を以「虚実」「善悪」の中を行ふとは云ふなれば、我家の俳諧初一念の趣向を無念無相の場よりうかみ出しますゆへに、爰に五戒も五倫も具足しています。依之句作に自己の作を嫌ひて、自然となせる句を秀逸と立ます。『しからば人いはん句を作つて俳諧にたはる、処に、仁義、五常、五戒等有やといはん。さに非らず。第一に人和、仁礼の二つを兼、淋しきは貧しくしてむさぼらず、富

れけるとなり。

扱『十論』の大意は、『論語』壹部を鏡といたして、世法は孔子の和節にならひ、文法は孔子の風雅を学びて、教に三條の法を立。第一に世上の人和、第二に例のおかしく、第三に例のさびしく、此三つを以て句を調え、^ウ身をおしへて、此『十論』を以て世上を取さばきまする故に、洛の去來も、武の素堂も、彦根の汶村等は此書を見て「俳かいの『論語』と評しまして、其終獅子門の家に所持仕申す。然るに、「孔子は聖智安行とはいへど、俳諧を御伝へを聞かず、何を以孔子を風雅の祖といへるぞ」といふに、文は風雅の源なるに、孔子の『論語』の優遊たる、文に「虚実の自在」ならざる事なし。さいふ人は、「文」といへば紙に書筆に写すを「文」と斗こ、ろ得て、世法に風雅の有事をしらぬ也。「文」とは礼楽の和にして、「教」は人法に勸懲有事をや。抑儒書は現在をと、のへて詩書礼楽の文章をおしへ、仏経は未來をいましめて殺盜婬妄の教えをさづく。彼夫子の巨人に囲まれて、「天之未^レ喪^ニ斯^ニ文^一」とも、或は文王をしたひ周公を夢見ぬ如き、是皆「文」をしたひ給ふゆへなり。扱こそ、文字が評にも、「孔子の施^ス教^ヲ也。先^ス之^ニ以^シ詩書^ヲ而導^{クニ}以^テ孝悌^ヲ説^レ之^ヲ以^テ仁義^ヲ」云々。詩書は専風雅を表にして「教」を内に施され、『論語』は「学而」の篇より時^ヲ詩事の「文」をまなびて吾党の人と其道を論ずれば、又悦ばしく又樂し。是を以て此『十論』も、初め「伝論」より終「法式」迄、専ら表に「文」をてらい、内には其道を論じてたのしみ悦びぬれば、俳諧の『論語』といへる。尤なるかな。抑孔子の風雅の中に、子遊に牛刀の風論の如き、子路に鞞爪

のごとき、牛のおかしみも、ひさごの寂しみも、専ら孔子の俳かい也。その外段々多証なるを、曾子より子思にかたげ、子思より孟子の理につのりて、終に孔子のおかし味を^ウ失ふ。風雅の中にも俳諧の学者は、『論語』壹部をか^ミととして、第一に世法の和説を知るべし。誠や孔門の十哲より七十二弟の衆も、孔子の「虚実」を早くさとり、「權変」をよくしりたるは顔回^ト人に過ぎれば、「与^レ回言終日不違」とも「回也。屢空」共、虚実の二用を嘗給ふ也。終日孔子の虚実に自在にたがはず、教ゆべき事もなく、論ずべき事なし。故に「愚なるが如し」とは、馬鹿に似て其おかしみをしるされたり。「回は屢空し」とは、其時代、仏法の空縦中は渡らず、何が空しきや。虚実自在の事ならで、いづれかむなしからん。一簞の衾、一瓢の飲のさびしみを知べし。爰に三條の法も、夫子を大祖たる事を知るべし。然るを子思^ニ孟子の理屈より、北宋儒是を受伝へ、孔子の風雅をとり失へるを、翁是を^ニ見出して、現に儒仏の虚実をしんしやくして其二道を和らげ、俳諧の^一教を導給ふ。それを受伝へて先師が『論語の先後抄』をあらはし、『一貫抄』を綴り、『茶話禪』を作し、今又此『十論』を説出せり。

第一人和 仁なり。辞讓也。慈悲也。父子仁、君臣義、夫婦別、長幼序、朋友信、此五倫道に叶ふを、世上の人和調ふとはいふなり。されど五倫の道を行ふとて、「是が義なり」、「是が信なり」とかたつて行ふときは利屈なり。『為弁』に曰、「俳かいは親子兄弟とても、まして老若尊卑を隔ず、其時の言語に遊ぶ事は、例の虚実に自在なれば也」。実ぞよ、父子兄弟打連立、花見月見の道す

・性質

以上のように、不明な点も多いものの、『弁秘抄』は、支考や道統周辺の俳人たちが『十論』をどのような視点でとらえ、理解していたかを知るための、極めて貴重な注釈書である。内容の詳しい考察は後に譲るとして、まずは本文を紹介しておきたい。

(注1) ③④は、この箇所が「梅花仏、我師に咄し給ひて」となっている。

(注2) 廬元坊伝書の性格については、中森康之「美濃派の継承と断絶―何を伝え何を伝えなかったか―」(『連歌俳諧研究』103号 平成14年8月)を参照。

参照。

四 本文翻刻

前述、①『俳諧十論弁秘抄』(国立大学法人九州大学附属図書館蔵 支子文庫 911/h/381-2)を底本とした。

乾坤二冊。外題…俳諧十論弁秘抄 内題…なし

題簽中央 表紙 縹色無地。26.5糎×18.9糎。

翻刻にあたっては、旧字は新字に改め、適宜改行、段落変えを行った。また、濁点、句読点を補い、私に「」「』」などを付した(同じ用語でも付した箇所とそうでない箇所がある)。

また、本文には朱書き、貼り紙箇所がある。行頭項目の「○」は全て朱。それ以外の箇所は、〈朱〉(ハリガミ)で示した。

誤字・脱字については、②の本文と校合して、正しい形を()に入れてルビの形で示した。

〈例〉 たつ弓(たつがき)

『俳諧十論弁秘抄 乾』

俳諧十論序弁

此十論と申は、むかしの俳諧は、軽口雑談の如く覚えて、堂上方の歌の会、諸大名の連歌の隙気のみまらぬやうに、いざや俳かいせんとして謎話の賤しき事をいゝて慰みとせられし故、其時々の宗匠も同じ心にて身持も宜しからず。万づはいかい師といへば我俣にする風俗のやうに成来りし故、世上もとかく俳諧師は老荘の似せそんじのやうに申ならはせしを、蕉翁、「一碗の茶」に俳かいの「虚実」を悟り、古池の蛙に自己の眼を開きてより、夜に昼に月に年に造次顛沛道の道たる「時宜」を行ひ、句をなし章をなすにも、孔子の「優遊自在」を以て本とし、儒書に「虚実」の二用をあつかひ、仏經に「善悪」二つの一理をさばき、ひとつとして道に叶はざる事なく行ひ給ひ、猶や、儒仏の漢字は詞高遠にして耳遠きゆへに、俳諧の俗談平話に和らげて、老入道、与平三蔵が耳にもさとり安からしめん為に教を御立なされけれども、御存生の間は、直指を受ける談説をきく門弟おのづから其風化に見習ひ申べけれど、滅後はおのれくが辟見に落て、天地とともになれる俳かい、魔界に落ん事をなげきて、此「十論」を製作致さ

①から⑤まで、本文内容は基本的にほぼ同一である。ただし立項項目の掲載順、例話等に若干の異同がある（例えば、①②だけに収録された例句や例話もあるし、同じ例話が、別の本では別の項目の中で語られている場合もある）。その点と、「十論聞書」という題の有無（③は注釈本文末尾に有）から、①②と、③④⑤の二系統に分けることができる。ただし、それぞれの書写関係は未詳である。

（注）月日未記入で「月 日」とだけあり、その下に中川乙由、星山九朱、村瀬支考の三名の連名が見える。「村瀬支考」の署名は他に見たことがない。

三、成立、伝来、性質

・成立

内容から判断して、『弁秘抄』の原^{、著}者は支考であると考えてよい。支考の手控えを別人が筆写したのか、講義そのものを受講者が記録したのかについては分からない。

いずれにしても、その内容は支考の考えをかなりの程度反映したものであり、それに後人による加筆がなされ、現在の『弁秘抄』の本文が成立したと考えられる。後人による加筆というのは、たとえば、「梅花仏、廬元坊へ咄し給ふ」（18丁）などの箇所である。^{（注）}

なお本文中の「先師」という呼称は、『為弁抄』同様、支考が自らを呼んだものであろう。

・伝来

先に述べたように、①②と、③④⑤の二系統があり、①②については不明である。③⑤については、それぞれの識語を参考にすれば、『十論聞書』として道統系統に伝来したものである可能性が高い。

③は、上巻末尾に、「青雲斎雅兆」、つまり以哉派道統第十世逸歩仙の奥書がある。また、「黄鸚園師説 俳諧記文口伝秘決抄附録」という道統三世廬元坊伝の資料と一緒に写されていること、①②の「梅花仏、廬元坊へ咄し給ふ」の箇所が、「梅花仏、我師に咄し給ひて」となっていることから、少なくとも廬元坊の弟子が関わっていることがわかる。

ただし、廬元坊自身を経由しているかどうかは不明であり、さらには廬元坊の他の伝書と性質を異にする点^{（注）}などに注意する必要があるが、ここではひとまずおいておくこととする。

⑤の奥書は意味がとりにくいが、第五世以哉坊の書留を写した第七世白寿坊自筆の写しを、第十五世化月坊が写したものであると解しておく。いずれにせよ、三人の道統の名前が見える。さらに本書を「道統附属之書」と化月坊が述べているのである。

なお、④には「国井蔵書」の印が押されており、国井化月坊の關係の家の所蔵だったのではないかと思われるが、詳細は不明である。

以上のことから、この書は美濃派道統（以哉派）周辺に伝えられたものと考えられる。ただし、廬元坊をはじめ、歴代道統が『十論聞書』（『弁秘抄』）の存在や内容について語ったことを示す資料は、管見に入っていない。

本稿はそれを翻刻紹介するものである。

(注) 俳諧叢書『俳諧註釈集 下巻』(博文館 大正二年)による。底本は佐々醒雪所持本で、瓦全から菱田百可に伝えられたものという。現在所在不明。岐阜県図書館蔵本(G/91304/カ)は跋文を欠く。

二 諸本

現在同内容の本文を持つ写本が五本確認できる。

- ① 『俳諧十論弁秘抄』二冊(乾・坤)
(九州大学附属図書館蔵 支子文庫 911/ハ/38-1,2)
- ② 『俳諧十論弁秘抄』一冊(岐阜県図書館蔵 G/91304/カ)
- ③ 『十論記文秘説』二冊(岐阜県図書館蔵 G/91304/セ)
- ④ 『十論聞書鈔』四卷四冊(大垣市立図書館蔵)
- ⑤ 『俳諧十論聞書』二冊(中・下巻)(大垣市立図書館蔵)

①は序跋・奥書などではなく、本文のみ。最も保存状態がよく本文も整っていることから、今回翻刻紹介する底本とした。なお、③～⑤に見られる『十論聞書』の名称は見えない。

②は、①同様『弁秘抄』の名をもつが、「附弁」(①では「俳諧十論序弁」)および第二「俳諧道」から第五「姿情論」までの本文しかない。筆者、筆写年代などの記述はなく、本文も①とはほぼ一致するが、直接の書写関係はないと思われる。

③は、外題「黄鸞老師説 十論記文秘説」。内題は、なし。識語、「抑この秘書は、蕉門自然の要肝にして、神儒仏の三道を虚実の二字に披ひ、人和を元とするの第一なるべし。しからば、日々家務の閑を偷みては能く賞して味ひ、耳にし、そこに修行地の工夫あれと也。ながめて入て理屈に凝るな月と花 康々庵書」。「康々庵」は未詳。本文冒頭に、「俳諧伝道徳虚実姿情地修行変化法式」と、「十論」の段名を挙げる(「言行」が抜けているが、該当の本文は有)。また、上巻末に、「惣紙数表紙共八拾四枚 右一卷は、俳道の秘にて修行亀鑑の書なり。故有て予に伝る。後世に及ても他見をいましむべし。若模写にあやまりあらば、師によりて此伝を受べし。青雲斎雅兆敬写 文政二年卯春二月」という奥書がある。「青雲斎雅兆」は、以哉派道統第十世逸歩仙である。下巻第十段「法式論」の後には、「右十論聞書写之」とあり、「十論」の注釈はここまでである。その後、「雑談」、「黄鸞園師説 俳諧記文口伝秘決抄附録」、「俳諧條々」、無題の貼紙一枚が付く。

④は、国井氏旧蔵書。③と同様、「康々庵」の識語をもち、本文も「俳諧條々」まで③と基本的に一致する。ただし、③にある末尾の無題の貼紙一枚分の本文を欠く。また、「黄鸞園師説 俳諧記文口伝秘決抄附録」については、該当本文はあるものの同題名は確認できない。

⑤は、中巻と下巻のみ現存。中巻は「俳諧徳」から始まる。聞書本文については、④と同内容である。下巻末尾には、「右十論聞書終」とあり、その後、「右は雪炊先師の書留なるを写し得て秘し置もの也。白寿坊」と自筆の写。道統附属之書。時明治三庚午年八月春香園窃写之蔵」とある。「雪炊」は美濃派道統第五世以哉坊、「白寿坊」は同第七世(以哉派)、「春香園」は同第十五世(以哉派)化月坊のこと。

美濃派道統系の

『俳諧十論』注釈書・

『俳諧十論弁秘抄』〈翻刻と解題〉(一)

中森 康之
永田 英理

(百合女子大学非常勤講師)

一 はじめに

支考が「十論講」と称して、自身が著した『俳諧十論』(以下『十論』)の講義を各地で行っていたことはよく知られている。また、その講義録も自ら刊行している。『十論為弁抄』(以下『為弁抄』)である。

さらにもう一冊、「十論講」の講義録と称する本が知られている。『俳諧十論発蒙』(以下『発蒙』)である。これには、次のように始まる蝶夢による明和六年の跋文がある。^(註)

右俳諧の十論は、享保のむかし伊勢の国山田吹上町といふ所に於て、東華坊見籠著述しけるとぞ。此論著述の後より、住日庵をも十一庵と名付しとや。その庵にして講筵をひらきけるを、神官に武田何がし春波、つねに口下にありて講弁のしたしく筆記せる、口授秘訣の數條なり。

『発蒙』は、これを弟の春渚が、『為弁抄』や『去来抄』等と校合したものであるという。

現在支考の「十論講」の様子は、この二著によって僅かに窺い知る

ことができる。ただし、この両者には少なからず隔たりがあることに留意しなければならない。そこには、『為弁抄』は講義する側から、『発蒙』は受講生の側から書かれていること、『為弁抄』は支考自身の著述といえども、刊行用に書かれたものであること、『発蒙』は、多くの人の手を介しており、支考の口述がどの程度正確に反映されているかは未詳であるといった、大きな問題が含まれているのである。

ところで、いま、三つめの『十論』講義録が現存する。名を『俳諧十論問書』、または『俳諧十論弁秘抄』(以下『弁秘抄』で統一)という。原著者、成立年代、伝来などに関しては不明な点が多いが、蘆元坊、以哉坊、白寿坊、逸歩仙、化月坊といった美濃派道統周辺に伝わっており、注釈の体裁、『論語』を初め多くの古事や逸話を引用する注釈態度、俳諧を「人和」や「世法」などと結びつけた解説等は、多くの点で『為弁抄』と共通する。しかも、『為弁抄』には見られない語も多数注釈対象として取り上げられており、その説明に関しても、比較的わかりやすいものが少なくないのである。なお、『弁秘抄』には所々に『為弁抄』が引かれている。